無断転載を禁じます。

１６　はらみ つつしむ おひ のアヤ

２６スス（長い年月を計数する暦の樹木・ススキの２６本目の時代）１００枝の、２８年の事でした。２８年はキアヱ暦での「サ・ミ・ト」にあたります。「サ・ミ・ト」の音韻には、いよいよ実に結び結実が叶うようなイメージがあります。

カシマのミヤ（現在の茨城県鹿嶋市・鹿島神宮の付近）に本拠地を構えていたタケミカツチは、後継ぎの継子が恵まれていなくてモンモンとしていました。「サ・ミ・ト」の年に当たり、何かしらの解決の成就が期待されるかも知れない。と、ほのかな希望を抱いたのでした。タケミカツチには、一人娘のヒトリヒメさんだけが居ただけでした。男の子が生まれなかったので、落胆したタケミカツチはイミナ（実名・まことな）を付ける気にもなれなかったので、ヒトリヒメと、呼ばれるばかりでした。その後も、子宝に恵まれないタケミカツチさんでした。

今年は「サ・ミ・ト」の年だから…、　と。かねてからの昵懇のフツヌシさん（ひょっとすると、父親である可能性あり。ホ１９Ａ-３・２０・２２～２３、１９Ｂ-６）の、許に相談に訪れたのでした。　フツヌシさんは、カトリのミヤ（現在の千葉県香取市・香取神宮）に住まいしていました。これは、これは、良く来て下さった。タケミカツチさんを歓待するフツヌシさんでした。

ひと段落昔話にも花が咲いたのでした、そこで、タケミカツチはいよいよ本題について述べる事にします。

『フツヌシさんも、重々ご存知の事でありますように、私のもとにはヒトリヒメのたった一人の一人娘が居るだけです。もうこれから未来、継子となるべき男の子が生まれる事もないかと思うのです。

さて、かねてから、噂で聞き及んでいるアマノコヤネさんは、まだ独身の事。あれほどの、見識を持つ人はなかなかに珍しいものだと思うのです。アマノコヤネさんは、カスガのカミとの褒め名を賜ったとも聞きました。

かつて、お知り合いになった事を存じております。そこで、我が娘ヒトリヒメとアマノコヤネさんとの縁組を橋渡ししては貰えませんでしょうか？これは、私どもの強い願いです。どうぞ、カンツキミ（とっても尊敬した表現）よろしくお願い申し上げます』

これは、良い話です。次代を背負う中心人物になるべきアマノコヤネ。そして、イサオシ（功績・タケミカツチの場合は主に武功）を重ねたタケミカツチの一人娘さんとの婚姻です。フツヌシは最大の応援をする事に決めまし

（C）　池田　満

た。

『血筋を調べましたら、オヰ（甥）にあたるのですね、ワカヒコ（アマノコヤネ）は。先立ってのミクサタカラの授与使の東赴の際に、親しく歓談しました。それからは、親しくなってフミのやり取りなどもしての深い交際が続いています。かれ、アモノコヤネが、あなたの入り婿になってくれると本当に良いですね。それは、新たな我が子を得たようにも思える程の、私しにとってもの、大きな喜びです。

絶対に実現させようとの強い願いを込めて、仲立ちをさせてもらいましょう』

フツヌシさんは言います。根回しも準備周到に、と。まず先に、ヒタカミのミヤコ（８代アマカミのオシホミミさんの首都）に許可を求める使者を立てます。オシホミミさんへ了承を得て、それから、アマノコヤネの父親に申し込みに行きました。アマノコヤネさんの父親はココトムスヒさんです。フツヌシと、タケミカツチの２人がうち揃っての、ナカクニのココトムスヒさん、アマノコヤネへの婚姻の申し込み旅行です。はるばる、ホツマ（関東地方）から、ナカクニのカスガ（現在の春日大社の場所）へでした。ココトムスヒさんの親子も、この縁組に了解しました。そこで、フツヌシと、タケミカツチ、そして、ココトムスヒとアマノコヤネの４人は東北地方のミヤコに向かいます。９代アマカミのオシホミミさんに報告のためです。

事の次第をお聞きになられたオシホミミさんは、お許しのお言葉を述べられました。フツヌシと、タケミカツチ、そして、ココトムスヒとアマノコヤネの４人は、オカム（敬拝）するばかりでした。

そののち、フツヌシとアマノコヤネは、元の本拠地のナカクニに帰ります。そして、アマノコヤネの入り婿の段取りを整えます。ココトムスヒは、祝言の日取りを占って決めました。それで、タケミカツチと、ヒトリヒメの待つカシマのミヤ（現在の茨城県鹿嶋市・鹿島神宮の付近）に赴いて、入り婿の祝言がおこなわれました。アマノコヤネと、ヒトリヒメは仲の良い夫婦となりました。

アマノコヤネは、９代アマカミのオシホミミさんに仕えます。

そうこうしている内に、ヒトリヒメさんが妊娠したことを、ミヤコに報告がなされました。安産を願うの　は、９代アマカミのオシホミミさんの御心でもありました。そこで、安産を導くための相談の使者を使わすことになさいます。

オシホミミさんは、安産の相談使を決められました。それは、３６人もの子宝に恵まれた、コモリカミ（ミホヒコ）が適任だろう、と。

このような訳で、コモリカミがヒトリヒメの許を訪ねたのでした。思いがけない事に、コモリカミは、ヒトリヒメに、「みたね産む　みはた」を教えて欲しい、と言われました。それは、アマノコヤネから、コモリカミが教えて

もらった事だったのでした。師匠を差し置いて、わたくしが出しゃばっても、はばかられます。それで、コモリカミは辞退したのでした。

『そのフミは、アマノコヤネさんに教えてもらいましたものでした。わたくしからの、又聞きなどより直接アマノコヤネさんに教えてお貰いの方が、より、正確なのではないかとおもいます』

そこで、ヒトリヒメは、夫のアマノコヤネに尋ねました。

アマノコヤネは、言います。

『それはそうですが、わたくしは座学だけです。先人のフミを伝え知っていただけなのです。実学は未だしなのです。それは、経験豊かなひと（他人）に教えてもらうのが良いと、思っていたのでした』

これを聞いた、ヒトリヒメも事情がわかったのでした。

こうして、コモリカミ（ミホヒコ）が「みたね　フミ」の講義をする事になったのでした。フミを紐解いたコモリカミが解説を始めます。

『天地の初めに出来る時の話から始めましょう。

最も初めの時、ウイのヒトイキ（茫洋として、さらに強い力の発露である）が放たれたのでした。アメミヲヤの発せられたイキです。これは、丸くマトカ（丸いこと）なのですね。それで、膨らんで行きますと、水に油を浮かべたように、軽いモノは上方に浮き上がってきます。自然の力が働くのでしょうね。軽いモノ、これが、「ヲ（男・後の時代に陽）」です。「ヲ」は上方に浮上して「アメ（気体の世界）」を形作ります。逆の重いモノは「メ（女・後の時代になって陰）」です。後に下方に下降してゆきます。ドロドロとした状態が、やがて、ハニ（固形物）とミツ（液体）とに分離します。ハニ（固形物）の象徴はヤマ（山）です。ミツ（水）の象徴はウミ（大海）です。さて、ヲ（軽いモノ）は、アメ（気体の世界）になっていました。この実態の表現としてウツホ（気体）と呼ばれます。ウツホ（気体）は動きを生じますとき、カセ（熱くないエネルギー）が働いている事が解ります。カセ（熱くないエネルギー）は、ホ（熱いエネルギー）にも転換し得ます。

ヲセ（ヲ・男・後の時代に陽）のムナモト（軽くて浮かび上がって行くモト）は、集まって丸いヒ（太陽）になります。それは、宇宙の中心近くに回ります。ヒ（太陽）の周回軌道をアカキミチと言います（現代では地動説が正しい姿だと解明されています）。

イメ（メ・女・後の時代に陰）のミナカミ（重くて沈み降って行くモト・カミ）は、集まってツキ（月）になります。ハニ（固形体）に近いため、ヒ（太陽）よりもクニタマ（地球）に近い軌道を回ります。ツキ（月）の周回軌道をシラミチと言います。

こうして、５要素のウツホ・カセ・ホ、ミツ・ハニが分離するのでした。

さて、この５要素ウツホ・カセ・ホ、ミツ・ハニが、合わさりあう事でヒ

ト（人間）が発生したのです。　人類の発生後の後の生殖は、男女の交接によって図る事になります。

ヲ（男性）は、ハニ（より重いモノ）に向かってトツギます。そうしますと、カリ（光が放たれてゆくさま）のシシナミ【詳細は未詳】は、ホネ（骨格）やアフラ（油）を作ります。メ（女性）はア（より軽いモノ）に向かってトツギます。そうしますと、カネのニシナギ【詳細は未詳】が混ざる事になり、それで、チ（トは誤写で、チが正しそうです。血液）や、ワタ（内臓器）を作ります。

具体的な形成の状況は、こういう経過をたどります。ヲ（男性）のカリ（光が放たれてゆくさま）のナミ【（カリのシシナミか？）詳細は未詳】は、タマシマ（子宮）へ行き至ります。そうしますと、チ・ナミが出会い合体をします。合体しましたら、自然の法則道理に、ヒル（日中）は、軽いモノは上方に昇ろうとします。左回りに上ります。ヨル（夜）は、白いモノが上になって、右回りに重いモノが下ります。こうしてグルグルと、回転を続けて成長を遂げて行きます。翌日には、フタメクリ（２回転）。そのまた次の日には、ミメクリ（３回転）と回ります。ミソカ（３０日目）には、３０回転です。３１日目、３２日目、３３日目になりますと、この３日で充足しまして回転も緩んできます。これが、タラ・ムです。つまり「た（ヲのナミ）」と「ら（メのナミ）」との合体が・混合が・重合が十分に行われた、そして「む（成り固まりつつある）」と言う状況です。これが、ハハ（成り出でるところのもの）の、ツツ（培い繋がりて形成の大元の）が、「シ（いよいよ完成した）」に成り得たところの、ミ（結実・小さく完全に纏まった実）の意味でありましょう。

この頃になりますと、生成中の赤ん坊に男女の差異が認められてきます。男の子でしたら、息（呼吸）の数が１３６８０になります。女の子でしたら、息（呼吸）の数が１３１８０になります。

この、詳しい事情を説明しましょう。

ミタネ（赤ん坊のタネ・種子）を得た母体は、息（呼吸）が増加してきます。

１日に３６０の息が増加します。２日目は７２０の息が増加します。３日目は１０８０の息が増加します。それで、３０日目になりますと、１０８００の息が増加します。３８日目は、１３６８０です。さて、元の母体の息との合計は２６８４６です。このように、イキ（息）が増加してきましたら、そろそろ、コタネ（子種）の息数の増加量は止まって来ます。ミメクリの方は、２か月目になりますとミカハシリ【（三日間はこのままの状態維持、か？）詳細は未詳】シハサラニキル【（白いホネが、赤い血や内臓器を纏い着る、か？）詳細は未詳】ことから、「キサラキ」と言うわけです。このため、ハハ（母親）

は行動を慎んで衝撃などを受けないようにするべきです。高い所に上るなどの、危険を防いで下さい。

６４日目になりますと、６４回転の極まりに達します。ミメクリ（回転、か？）は、すべての総合で１０８０【どうしてこうなるか？　詳細は未詳】になります。これで、コタネ（子種）の基礎が出来上がりです。オノコロ（自ずからに凝結して自立すること）となります。エナ（胎盤）に結ばれたヘソ（臍）のヲ（緒）が、太さを増してカワクルマになります。カワクルマとは、光や齎されるものが勢いを増して流れ込み、あたかも、回転の中心のようになる状態をいうのでしょう。それで、シシ（肉体）が育ってゆきます。これで、コタネの重みが増して来るのでしょうね。回転が遅れて来ます。６５日目には、回転数が一つ減って６３回転になります。次の６６日目には６２回転になります。こうして、３か月目（８９日目）には３９回転になります。これで、三日間は一休みです。ミトリ・ハナ（身体の初めのポヤポヤした状態）になりました。ヤヨイサム【（いよいよ、心が寒くなる？　８日の夜か？　詳細は未詳）】のことから、ヤヨイと言うか？【詳細は未詳】この時も、ハハ（母親）は行動を慎んで衝撃などを受けないようにするべきです。

４か月目になりますと、ミトリ・ハナ（身体の初めのポヤポヤした状態）に、ウルウ（潤いが備わって来る）ようになります。ここでも、ハハ（母親）は行動を慎んで衝撃などを受けないようにするべきです。

５か月目になりますと、元のメクリ（回り）の１回転に戻ります。イキ（呼吸）は２６８４６です。ハラオヒ（腹帯）をこの時に着（つ）けます。これも、ハハ（母親）は行動を慎んで衝撃などを受けないようにする意味からです。特に、５か月目はコタネの成長にとって重大な変化が生じます。これまでは、単に物体・物質の上での成長でしたが、５か月目は「こころ」の備わる時期なのです。アモト（宇宙の中心）から、アラミタマ（タマ）が降されてきます。ツキ（月）の要素のニコタマ（シヰ）も備わって来ます。そして、両親からのタラのヒ（タマノヲ・魂の緒）の３つが結合されるのです、「ココロ・イキ（こころ）」になります。そうなりますと、露が溢れるように潤いが増します。

次の、６か月目になりますと、湿潤から、乾燥にと方向が変わってきます。それで、ホソ（ヘソの緒）がさらに太くなってチシル（血液）が多く行き来してきまして、カフ（光を放って）きます。

７か月目になりますと、チシル（血液）がニ（赤くなる？　煮る？）るようになります。それで、５色のハニ（固形物）が備わってクラワタ（内臓器）を形造ります。７月の別名のアフミとは、このことで、色付き形の備わり実になることです。この時期も、ハハ（母親）は行動を慎んで衝撃などを受けないようにするべきです。

８か月目になりますと、ソミハ【１３ハ、詳細は未詳】の「ハ【詳細は未詳】」が出来ます。ですので、ハハ（母親）は、この時期にこそよく気を付けて、行動を慎んで衝撃などを受けないようにするべきです。ハハ（母親）とは、ウツホネ【ウ・ツホ・ネか？　ウツホ・ネか？　ウツ・ホネか？　未詳】なるが故の理由です。また、チチ（父親）のことをタダ（タタ）ともいいます、この意味は、イタク（抱く）のイメージから来ています。「タ」とは、それは、ハル（春）に諸々の草木樹木が萌え出ずる季節を言います。　集まり集合させて萌え出でさせるのが「タ」です。「タ」は「タダ」ともいいます。

カカは、まさに秋の澄みやかになった清冷な雰囲気をいいます。イツクシニ　カカケアカセル　ココロサシ【詳細は未詳】の理由です。

チチ（父）の語意は、チテト【（チ・テ・ト）詳細は未詳】のヲシテ（文字の形状）から発生する意味です。つまり、「チチ」と「ハハ」とが、アメをハニにアミテ（形而上のモノを、物体化させる事）の直接のモノがミヤビです。物質である身体に思いが備わるのです。これがミヤビ（意識・記憶）です。テテ・タダとも言えますね。「チ」が「テ」にて、「タ」になった。愛呼の雰囲気を含めて、「トト」「カカ」とも言うわけです。

このようになって、９か月目にはミメ（目や顔かたち）も、コエ（音声の発生器）も備わります。

１０か月目にはクライシ【詳細は未詳】がなります。

１２か月目には、いよいよ、月満ちて、産まれる事になります。これが、ミタネ（降され生育するコタネ・子種）の生育の次第です』

このように、詳しくコモリカミ（ミホヒコ）が「ミタネ フミ」の解説をしたのでした。じっと訊き入っていたヒトリヒメは、悩みを打ち明けます。それは、体調の不良に関しての深い嘆きでした。

『お腹の赤ん坊の事を思うと、いつもいつも、不安に駆られます。それは、小さな灯し火がほのかな風にも消えてしまうのでは？　と、思うような大きな不安感があるのです。タマコ（コタネの元）が、消え失せてしまうのではないか？　それは、大きな不安感なのです。

それででしょうか、ある日は、胸がつらくて、ス（酢）を無性に飲みたくなります。

顔ものぼ（上）せたりして、して、辛いのですが、逆にヱタ（手足）は冷えるのです。毎日毎日、苦しく思い悩むばかりです。ご飯も食べられない日が、多くあります。胸は痛み、眼はくらんで歩くにもままなりません。

たまに、気分の良い時は、意味もなくタマコ（豆のような丸いモノ）をこっちの皿に移して数えたりも出来ます。

お腹の赤ん坊のためにと、養生してはいますが、自分自身の体調がほとんど病気のような状態ではどうなのでしょうか？　不安です。　イキスヒトト

キ　ヨソシホト【詳細は未詳】　タラヌヤマフノ　カナシサヨ【詳細は未詳】』と、言って、ヒトリヒメは不安を訴えます。ヒメの体調の不調さはだいぶ酷いものだったのでしょう。

３６人の子宝に恵まれたコモリカミは、色んな症状について見聞きしていました。それで、診断をする事が可能だったのでした。

コモリカミは、ツワリ（妊娠時の悪阻）の酷いヒトリヒメに同情しました。安心こそが、一番の薬ですね。コモリカミは、チハラ（大きなお腹）を撫でて、診断しました。それで、解ったのです。にっこりとヱミス・カホ（先祖伝来の笑顔）でほほ笑むと、言いました。

『今、ヒトリヒメさんの息の数を勘定しました。そうしましたら、少し少なめのイキの数でした。これは、おそらくヒメミコ（女の子）であると思われます』

応えて、ヒトリヒメも答えました。

『そうなのです。わが夫のコヤネも、女の子を儲けたようだ。と言っていました』

そうして、アマノコヤネの語った事（トコ　カタリ）を、ヒトリヒメが述べました。トコカタリとは、「ト（整い得ること）」・「コ（子種）」を語るの意味と考えてよいでしょうか。

『タチカラ・ワコ【タチカラヲのような元気な子供を？　タチから？　未詳】を、招き得たようだと思います。これは、私にとりましても大きな喜びです。先ずは、報告したいことです、朝廷に。おかげさまだと感謝します。

子種の成り備わった経過は、このような次第かと思うのです。

つまり、カト（齎されるものが集まり実体化すること）を開くことが出来て、シカ（成り出つる成果、輝き）はこのモフケ（実になって実体化してくること、その今に明らかになる事）であるわけです。まさに、モフケのムネのハナです。

男の子か、女の子か？　その成り定まりの分水嶺についての左右の異なりは、以下のような事情ではないかと、考えるところです。

男の子になる場合は、初めに「ヒ　ノ　ミ　タマ（太陽の分霊としてのタマ）」がタネの初発を生じると思うのです。それは、初めに、コモリクのミハシラ（生命は物質の内に、その本体がある事）に対しての働きかけをするわけです。「タ（左の位置であり、朝の時間帯であり、春の季節であり）」に位置をとって、「メ（より重いモノ・ヨルのナミ）」を招きます。そうしますと、招かれた「メ」は包まれて行きます。「メ」を包むモノは「ヲ（より軽いモノ、太陽のナミ）」です。「ヲ」が巡り上がり、「メ」を包むので、「メ」は狭められ絞られてゆきます。それで、「ヲ」が優勢になるのです。その結果、ハナ（初め・出でる）のクキ（ひとつの棒のようなもの）が生じて来ます。これが「シ

無断転載を禁じます。

チ」です。ここに、男の子にと、分化生成するメカニズムがあるのです。

女の子に生まれ来るのは、この逆になりますね。初めに「メ」の「メ」【詳細は未詳】から「ツキ　ミ　タマ（月の分霊としてのタマ）」を享（う）けます。それで、ミヤ（結実の起きるところ・子種の宿る所）をウルホ・ス（潤す）ことになります。それで、逆に内側にもウル（潤い）が満ちる事になります。次いで、ヒノミタマ（太陽の分霊としてのタマ）を受け入れるわけです。この場合のマシワリ（子種にと備わり宿り具現化する過程）は、「メ」がまず先にメクリ（循環を開始）をします。それで、「ヲ」を包みます。「ヲ」は包まれますので「シチ」は生じません。「タマシマ」が内側にツホミ（窄みます・つぼみます）てゆくのです。これが、女の子になる初めです。「メ（重いもの）」は、ツキ（月）に象徴的にも見て取れますように、重いために遅くメクリ（循環）ます。一日に３４７づつ回転を増やしてゆきます。２９日目になりますと１００６３回転に達します。次いでの３０日目には、ひとつ戻ります。３１日目より、１日に１９づつ戻り行きます。３４日目にもひとつ戻ります。それで、サツメ（５９のこと）減少することになるのです。３５日目からは、また、増加になります。１日に３４７づつの増加ですので、４０日目には元の息と合わせて２６３７２になって「ミ（具現化）」が完成します。その後はヱナ（胎盤）の形成も、アメツチ（天地宇宙）の形成に準じて進んで行きます。やがて、月満ちて産まれます。

ヲヲンカミ（アマテルカミ）は、９６か月もの長孕みだったといわれています。

この、私、コヤネ（アマノコヤネ）は、１００か月の長孕みでした。

タチカラヲは、３６か月の長孕みでした。

サルタヒコは、なんと、１６年（１９２か月）もの長孕みだったそうですが、極めて珍しい例です。

男の子は、通常は、トシ（１２か月）の孕み期間で産まれます。女の子は、１０か月の孕み期間です。母親のイキス（呼吸の数や強さ）が良ければ、安産に産まれることの前兆と言えるでしょう』

このように、コモリカミ（ミホヒコ）は、解説をしたのでした。じっと聞いていた、ヒトリヒメさんは、さらに質問を繰り出すのでした。

『タミ（一般国民）には子供の数が、多くあります。でも、カミ・トノ（国のリーダーたちや、豊かな実力者たち）には、子が少なかったり、継子に恵まれなかったりしています。どうしてでしょうか？』

コモリカミは、答えます。

『セオリツヒメさまの、慎みの事を、思いだして下さいますでしょうか？新婚早々でも、入内したような場合は大変です。セオリツヒメさまの時は、トヨケカミの崩御の時期と重なってしまいました。アマテルカミは、遠いチ

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

タルクニ（今の山陰地方）に行幸なさる必要があります。ミヤコは、空けるわけにもゆきません。全国のマツリコト（政治）の課題が山積ですから。それで、セオリツヒメさまは、ミヤコ（首都・富士山南麓）にお残りになったのでした。

一方の、タミ（一般国民）は、毎日毎日が肉体労働です。身体は、確かに疲れますが、気持には大きなプレッシャーがかかる事はありません。それで、心のアフラ（ガソリンのような原動力）は余裕があるのです。子宝に多く恵まれるのは、このお陰です。

クニカミ（後の国司）などのリーダーは、タミ（一般国民）のために、こころを尽くして気遣い（きづかい）で忙殺されます。それで、こころのアフラ（ガソリンのような原動力）が、擦（かす）れるほどに減ってしまうのです。子種が少ないのは、このためです。

さらに、タカキミ（位の高いリーダー）などには、もう一つの、要因も重なります。それは、他人からの羨みの気持ちです。一般の人たちは、キミの気苦労など知らないので、外見だけで判断するわけです。立派な着物を着ているからと、羨みます。食べ物に不自由しないと言って、羨みます。それで、オキテ（決まり事・ノリ）を恨みます。さらには、キミを謗（そし）ります。誹謗中傷を言って溜飲を下げるのです。が、それが、アタ（目に見えない弓矢）になるのです。アタは、タカキミ（位の高いリーダー）子種の出来にくい原因になります。

まだ他にもあります。キミ（古代の天皇陛下）はアメの祭り（宮中祭祀）をするのが、大きなお仕事の一つです。その、実施に必要なため、多くのおキサキさんが入内なさります。しかし、キミはおひとりです。このため、イフリ（いびり合い）が起きやすいモノです。わたくしの父のコトシロヌシ（クシヒコ）の青年の次期は、アマテルカミのお側にお仕えしていました。クシヒコは、アマテルカミをご尊敬申し上げる事がとっても強烈にありました。それで、おキサキさんが、クシヒコを恨んだりもする程でした。そんな事が、日常ですので、子種が少ないのも理解できることだと思います。

恨みや、妬みが、子種に成長するのを妨害してしまうのです。

国民全体の幸せを一身に担ってのキミ（古代の天皇陛下）。そのメクミも、ついつい、忘れさせてしまうのが、恨みや、妬みです。桜の木を見て下さい。宮中に、ヒカシ（東）の庭に植えてあります。（６－２９、２４－５９）このサクラは、妬み・恨みが渦巻くと枯れるのです。

妬み・恨みは怖いモノです。愚かな気持ちで発せられたにしても、強い妬みは、強烈な武器になります。　イソラのカナツヱ（金属の棒）のように強烈な武器です。カナツヱで、打ち砕かれて子種は流れ消えてしまうのです。もしも、流れ消えるまでに響かなくても、カタ・ワ（成長に欠けが出る、障

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

害が生じる）として子種の成長に甚大な障りが出ます。あるいは、イソラの妬みのそのイキ（息）が沢山集まると、堅い鱗を生じます。１３０００のイソラのイキが、集まって鱗のオロチ（蛇）を生じます。タマシマ（子種の成長の為されてゆく過程）の、ちょっとした間隙をねらって、コツホ（子宮）に侵入します。それで、コタネ（子種）に噛みつきます、噛み砕きます。それで、子種が流れ消えてしまったり、カタ・ワ（成長に欠けが出る、障害が生じる）での成長になったりするのです。

一般の人で貧しいと、豊かなトミ（地方のリーダー）を羨んだりします。さらには、恨みを持ってしまいます。それは、アタ（目に見えない弓矢）です。アタが、子種を滅ぼしてしまうのです。

妬みは、他人に対する悪影響のほかにも、逆に自分自身への障害も起きるものなのです。他人を妬（ねた）むと、1日に3回ホノホ（こころを焼く炎）に苛（さいな）まれます。それで、身体も痩せ細ってしまうのです。この経緯から言えるのが次の事です。「ネタム・ネタマル　みなトガ（大きな罪穢れ）ぞ」と。

たとえば、こんな例が解り易いでしょう。宮中には多くのおキサキさん達がおられます。それぞれに、色彩・光彩の異なるハナ（花・華）だと思うのです。そこには、優劣などないと思います。キミ（古代の天皇陛下）のみ心が、アオ（青色）ならば、ハナ（華・花）のアオ（青色）をメテル（愛でる）のです。キミ（古代の天皇陛下）のみ心が、キ（黄色）ならば、ハナ（華・花）のキ（黄色）をメテル（愛でる）のです。キミ（古代の天皇陛下）のみ心が、アカ（赤色）ならば、ハナ（華・花）のアカ（赤色）をメテル　（愛でる）のです。キミ（古代の天皇陛下）のみ心が、シロ（白色）ならば、ハナ（華・花）のシロ（白色）をメテル（愛でる）のです。キミ（古代の天皇陛下）のみ心が、クロ（黒色）ならば、ハナ（華・花）のクロ（黒色）をメテル（愛でる）のです。それは、同じ心において相求むるからなのでしょう。それぞれのご自身のハナ（華やかなること）と、キミ（古代の天皇陛下）のおこころ（気持ち）と、合うか合わないかだけの事なのです。それですので、恨むことは無しにしましょう。お側に呼ばれるかどうかは、おこころが、合うか合わないか？　です。若しも、召されても、自慢をタラタラと吹聴することはしないようにしましょう。恨みを買うのは良くないからです。ツツシミ（慎み・ミを包んで護る）とは、この事です。

さらに、もう少し詳しく説明しましょう。

おキサキさま達、また、一般の女性の人にも知ってもらいたいところです。

色々な、ハナ（華・花）の色のあるところ、それが、召されるわけでしたが、色も移ろいます。ハナも散ります。ハナも散ってしまったと、他所の花を召す時は、その花盛りの時です。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

良く考えてみましたら、自分にも花盛りの時期はあったのです。誰を恨んでも仕方がありませんね。これを、間違えての逆恨みなどをしてしまうと、社会的な制裁さへ受けることになってしまいます。逆恨みで、そんな理由で、タチ（剣・武器）を持たせること、は、まったく無意味な事です。そんな理由で、ツヱ（制裁のための棒・武器）を持たせること、は、まったく無意味な事です。まして、そんな理由で、他人を打ち殺してしまう事など、まったく無意味な事です。

女性は、一心に一途に思い詰めることが多いものです。それで、妬みの心を思い募らせて、心に患ったりします。胸に燃える妬みの炎が、やがて、鱗のオロチになって、他人の子種を噛み砕きます。そんな、禍（わざわい）を防御するための「ヨツキ　フミ」です。この、「ツツシム」ことの詳細を良く理解して下さい。

「ハナ」と、「ハナ」が、打ち合いますと、お互いが共に両方とも散ってしまうのです。忘れてはならないのが、「ツツシミ」とは、日常の常に気をつけることなのです』

コモリカミの解説に、じっと聞き入るヒトリヒメさんでした。

そして、まだまだ、聞きたい事があるので。と、言うのです。それはそうです、初めての妊娠・産児は大変に大きな出来事です。不安に思う事ばかりですから。　そこで、コモリカミは暫くの間、滞在することになります。おそらく、カシマのミヤに、滞在したのでしょう。ヒトリヒメの父親であるタケミカツチが、コモリカミを歓待する気持に溢れていることは、絶大だったからです。

ある日のことでした。

ヒトリヒメさんは、また、質問を発しました。

『オヒ（妊娠帯）のことについて、詳しく教えてもらいたいのですが』

コモリカミは答えます。

『妊娠の時の腹帯は、タマキネ（トヨケカミ）の教えに詳しくあります。それが「ミミのハ」です。「シナワキマエテ　ミハニヨル」とは、「ミミのハ」によって詳しく述べます、と言うことです。それによりますれば。

オヒ（帯のこと）は、ヰ・ワ・ミ（ヰツイロノ　ハニモテツクル１４－２５、ヰイロハニ　コレクラワタト１６-２６）の固めをするための物です。つまり、五色の固形物による物質化の成長を、外的な妨害要素からの保護のためのものなのです。

男の子を孕んだ場合には、オヒ（帯のこと）は下合わせをします。

女の子を孕んだ場合には、オヒ（帯のこと）は上合わせをします。

孕みのオヒ（帯のこと）が作られた経緯は、トヨケカミの時代にありました。トヨケカミが、皇太子の誕生を願っての祈願の時のことでした。世継ぎ

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

子の誕生をお祈りしようと、トヨケカミは決意されたのでした。というのも、トヨケカミの愛娘のイサナミさんは、世継ぎ子を得たいと、強く願いました。そして、父のトヨケカミに悩みを詠嘆を込めて、訴えたからでした。イサナギさんと、イサナミさんは7代アマキミの重責を担っているからでもあって、世継ぎ子の誕生が全国民的な願いにもなっていたのでした。そこで、トヨケカミは、カツラキの山に世継ぎを得るために祈るヤシロ（お祭り場所）を建てて、祈ります。

そうしましたら、アメ（空）からニ・イトリ（赤いイトリ、大きな鳥）の羽根が一葉落ちて来たのでした。

アマツノリ（アマのお告げ）であるかも知れない。

それは、イフキノ
ナルモミチ　ハケテカツラキ
イトリヤマ

【詳細は未詳】

この、一葉落ちてきたニ・イトリ（赤いイトリ、大きな鳥）の羽根の、羽根先を見ますと、２４のスチ（筋）がありました。これは、アワウタ（４８音の基礎音韻のウタ）の２分の１の数になっているのです。そのままで、縦横２４筋ずつで編めば、４８のアヤ（布・言葉・文章）になるわけです。それは、珍しいものでして、普通は１５の筋の分かれ筋になっているので、２４筋はとても珍しいです。そこで、秀麗・綺麗な鳥としてツル（鶴）を探し求めましたら、２４筋の分脈になっているのでした。ツル（鶴）こそ、良いものではあるまいか。そこで、ヲ（オス・雄）のツル（鶴）の羽根を、タテイト(縦糸)にします。メ（メス・雌）のツル（鶴）の羽根を、ヨコ イト(糸)にします。そうして、ヌノ（布）を織り行きます。この布は、ケフのホソヌノと、言うのです。それは、ケ・フ・ノ、ホソを為し行くヌノの意味です。それで、４８（よそや・音韻の数）が縦横に備わった事になるのでした。〔ミハラ（子種が種を成して、さらに、実体化する）の、オヒ（固め護り、形に形成すること）とは、後の時代に御腹帯とも言いますが、実に深い意味が古代においては込められていたのでした。〕

ハハ（母・生成為し行くもの）のイサナミさんは、長い長い妊娠期間で、アマテルカミをご出産なさいます。その期間は、実に、９６か月と伝えられています。言葉の意味を考えてみましても深い考慮に基づいている事が解ります。この場合、ハラミ（孕み）とは、ハ・ラ・ミ（生成為し行き実体化させての事）の意味であるわけでした。

ハタレ・マが噛み砕こうとして攻め寄って来るのですが、防御がなされます。それは、防ぐものは、オヒ（妊娠帯）です。ハ（生成・形成）をタレル（垂れる・垂れさせる）モノが、ハタレです。それが、マ（影響を及ぼす）なので、ハタレ・マと言う言葉で呼ばれるのです。ハタレ・マが噛み砕こう

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

として来ても、ヲ（オス・雄）のツル（鶴）の羽根の２４筋で、タテ イト(縦糸)にします。メ（メス・雌）のツル（鶴）の羽根の２４筋で、ヨコ イト(横糸)にします。合わせての４８筋のオヒ（妊娠帯）が護ってくれます。そして、４８の音韻数（元素の成り立ち）が整うのです。

ヒトリヒメさんのように、健やかなお方は、そんなハタレ・マのような悪い支障があるものでは無いでしょう。ですが、万一の場合の備えとして、オヒ（妊娠帯）を締める事をお勧めします』

コモリカミは、キワミのオヒ（ホ１６-６２）の来歴を、トヨケカミの故事から説明しました。

ヒトリヒメの傍（そば）で聞いていた、父親のタケミカツチは疑問を思いまして、問います。

『我が国は、イキス・ヒタチ（息栖のミヤ・常陸のミヤ）とも、呼ばれる事が多いですが、それは、オヒ（妊娠帯）に謂（いわ）れがあるとのことです。ですが、どの様な、意味でイキスと言うのか？　また、ヒタチと言うのか？　教えて貰えませんでしょうか』

コモリカミは、答えて言います。

『むかしの、昔、トヨケカミの教えに次のように有りました。

時として、アメ（朝廷・天皇陛下）からの賜わりモノ（宝物）としてのケフのオヒ（妊娠帯）は、アメ（天地創造の構造）に則（のっと）って織り上げられたものなのです。ケフはヒタチオヒ（常陸帯）の別名です。

それには、チチ（父親）の身長に、オヒ（帯）の長さを合わせます。そこに、ハハ（母親）のイキ（息・こころが来る事）がヒタチ（養い・恵む）となすのです。それで、イタク【詳細は未詳（こころが備わる事か？）】事が出来るのです。アメ（宇宙の中心）からタマ（魂の本体の方）の分け降しを頂きます。そして、ハ（地球の方）からシキ（魂の生命維持の部分の方）が編み込まれます。それで、タマシキが出来るのです。あとは、そこに、物質が備わって育って来ることで子種に成長するわけです。つまり、この生成の過程をチチ・ハハ（父親・母親）での役割分担を考えますと、次のようになります。チチ（父親）からの恵みはイタタク・「ア」（宇宙の中心から降臨するタマをこころにと、来させること）です。ハハ（母親）のイツクシ（こころにと編み為すこと）は「ノ（成りかためる事）」をするのですね、ハニ（固形化・物質化）への固化を。

アマテルカミも、この事を忘れてはならないと、おっしゃるのでした。そこで、イト（糸・こころの集まり固形化してゆく）を２４筋縒（よ）り合せて紡ぎます。それを、縦横にメ（横）・ヲ（縦）を準えてハフタエ（柔らかい絹織物）の織物を作ります。これを、毎朝の祈りの時に着用するようになさるのでした。毎朝、毎朝、アメツチに対しての感謝と、タラチネ（両親）へ

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

の感謝をお祭りとして祈るのです。そこには、子種の形成・生成への深い敬慕と感謝の念が込められているのです』

コモリカミが答えました。ケフはヒタチオヒ（常陸帯）の別名ですが、ケフとは、毎朝・毎朝の意味もあり、また、「ケ（来たり為さしめる）」「フ（開き発展するようす）」と言う子種が生成し成長する意味合いも込められていたのでした。この事が解ったタケミカツチは、とても、喜びました。

『そう云う事だったのでしたか、それでは、早速にケフのヌノ（布）を織る事にしましょう』

コモリカミは、「え？」と思いました。それは、タケミカツチは、以前にアマテルカミからハフタエのケフのヌノ（布）を賜っているのを知っていたからです。コモリカミは、聞いてみます。

『以前に、アマテルカミからの賜わりモノでハフタエをお持ちだと聞いたことがあります。それなのに、　また新たに別に、おるのですか？」

タケミカツチは、答えます。

『それは、ちゃんと保管していたのです。ただ、あんまり大事にし過ぎていて、タカラトノ（宝物殿）に入れっぱなしにしていました。今には、手にとってもボロボロの状態になってしまっていました。折角の、アマテルカミからの賜わり物の２枚のハフタエの織物なのに残念な事をしてしまいました。やっと、幸いにも、オヒ（妊娠帯）の意味の教えを受ける事が出来ました。うれしい限りです。

さて、オヒ（妊娠帯）を早速、織ろうと思います。オヒ（妊娠帯）を織るためには、父親の身長に合わせる必要がありますね。ヒメ（ヒトリヒメ）は、夫のコヤネ（アマノコヤネ）のタケ（身長）を知っていますか？』

ヒトリヒメは、父のタケミカツチに答えます。

『夫の身長は、もちろん知っています。ヒトタケ・フタ・ヰキ（１丈２尺５寸）です。かねて、聞いているのですが、アマテルカミのご身長と同じだそうです』

居合わせた人々皆が、

『これは、産まれ合いたるミメクミ（み恵み）ですね。有り難いことですね。嬉しいことですね』

と、意向同音に言い合いました。

ヒトリヒメも、目を潤ませて、

『いと、有り難き事です』と、笑顔です。

父親のタケミカツチも大喜びです。そこで、ハフタエのヌノ（布）を織り、娘婿の身長に合わせたオヒ（妊娠帯）を作ったのです。これは、アマテルカミのご身長とも同じでした。

ハラオヒ（妊娠帯）を締めれば、子種の成長に障害なし。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

その後の事が、ヒトリヒメは気になりだしました。
『産む時に、注意するべきことはありましょうか？』
コモリカミが答えます。
『出産時の事は、カツテカミが詳しく知っています。わたくしが帰りまして後に、カツテカミに来てもらうように言います。ご安心ください』
父娘ともに安心したのでした。ある日、タケミカツチはコモリカミに感謝するため、ご馳走を整えて招きました。そして、宴会のもてなし方々語り尋ねます。
『わたくしは、生まれ付き背も高いです、身長はヒタケムタ（１丈６尺・普通の人の倍）あります。また、力も強くて、普通のヤタ（８尺の身長）の人のヨロヒキ（一万人で曳くような）の大きな岩でも、投げ飛ばす事が出来ます。さらに、ウツロイ（ウツロヰ・ウツホの自然神）だって、力で押し拉（ひし）ぐ事が出来ます。それで、アマテルカミから２振りのツルギを賜ったのでした。
でも、考えてみましたら、いくら力が強くても、大したことないですね。もう、老齢に差し掛かった私などは、衰え行くばかりです。それに比べて、あなた、コモリさんは沢山の３６人もの子宝に恵まれての大いなる繁栄です。素晴らしいことです。
今、ここに、アカコ（赤子・宇宙の中心からの賜物の子種）の生し行きのミチ（方法・原理）を教えてもらう事がかなったのでした。何か、お礼をしたいところです。そこで、イシツツのツルギを、譲り差し上げたいと思うのです。どうぞ、お受け取り下さい』
と、タケミカツチが頭を下げての、譲与の申し出でした。
コモリカミは、びっくりです。アマテルカミからの賜わり物のイシツツのツルギを、譲ると言うのですから。
『わたくしは、アマノコヤネを師と仰ぐ人間です。アマノコヤネは、師とも、兄とも思っています。ですので、アマノコヤネの義理の父上は、わたくしにとっても、チチ（義理の父）に思えるのです。お礼なんて、受け取るわけにはゆきません』
タケミカツチは、頭を下げたままで、微動だにしません。受け取らなくては、朝までそのままの意志のようです。
コモリカミは、タケミカツチのこころを受け取る事にします。コモリカミが、イシツツのツルギを、頂いて受け取りますと、タケミカツチは笑顔で座を改めました。姿勢を整えて言います。
『子孫が絶えようとしている時に、たった一人の希望のヒメ（娘）に、漸くのことで子種の授かりが実現しようとしたのでした。それを、あなたに、子種のヨツギミチを教えてもらう、この、尊さは言うべき言葉もありません。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

コ、はタカラです。

イキスも良く知る事も出来て、新婚のミヤ（居宅）は、イキスのミヤと呼びましょう。コヤネと、ヒメ、とをここに水入らずで暮らしてもらいましょう。

わたくしは、こちらの家でフツヌシと共にヒタチオヒ（常陸帯）を作りましょう。そして、イキスのミヤに届ける事にします』

と、タケミカツチは言うのでした。

これで、コモリカミも、言い残す事は何もありません。帰京の挨拶も済ませたコモリは、アメ（ミヤコ・首都・タカノカウ）に戻って行きました。

タケミカツチは、カトリのミヤに赴きます。そこには、フツヌシが住まいしているのでした。フツヌシは、タケミカツチに血筋の極めて近い人物です。ひょっとすると、父親である可能性もあります。タケミカツチは、フツヌシに説明しました。それは、ヒタチオヒ（妊娠帯）の詳しい謂れ等、コモリカミに教えてもらった事などをです。そして、共にミヤコのオシホミミさんの許へ、お礼を申し上げる使いを出したのでした。ミヤコのヒタカミのミヤには、オシホミミさんも喜んでくださっておられるようでした。オシホミミさんは、ケフのホソヌノ（縦横に２４筋の糸で織ったヌノ）を織らせました。そして、この、ケフのホソヌノを、タケミカツチに授与なさったのでした。それが、「タカマノハラのカリミヤ」だったのでした。おそらく、大切なケフのホソヌノの授与に際して、タケミカツチは特別の場所を仮設したのでしょう。今も、鹿嶋神宮の飛び地の境内地として「高天原」が現存しています。この、「タカマのハラのカリミヤ」で、ケフのホソヌノの授与がなされたのですね。タケミカツチに従う人々、周辺に居住する人々は、「これぞ、ヒタチのミヤだ」と賞賛しましたのでした。タケミカツチに随従するモノノヘ（地方の警察官のような役職）の人たちは記念にと、カシマミヤを新たに建立してくれるのでした。

アマノコヤネと、ヒトリヒメを、新たなミヤに住まわせます。これが、イキスのミヤ（息栖神社）です。ここで、ヒトリヒメは、周辺の人々や、教えを求め来る人々に、イキスのツツシミ（妊娠時の注意事項）を教えます。また、病気であったりしたら、クスリ（薬）を教え授ける事もします。

ここに、カトリ（フツヌシのミヤ）のミヤと、カシマ（タケミカツチのミヤ）、さらに、イキス（コヤネ・ヒトリヒメ）のミヤに、それぞれヒタチのオヒを、時のアマカミ（天皇陛下）のオシホミミさんから賜ったのでした。それは、ヰ・ワタ・オヒ（ヰワタ帯）と言うのでした。子種の恙なき成長を保全する帯ですね。これは、長さ８タ（ヤ・タ、８尺）でした。一般国民男性の平均の身長に合わせたものです。そして、オシホミミさんは、この時にミコトノリ（詔）を出されるのでした。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

『ハラミのウチ（妊娠中の）遊びには、マメ（豆）を拾ろうのが良いです。それは、その子は、マメ（何事にも熱心であること）になる事でしょう。マメ（熱心さ）は、すべてにおいて、身の宝だと思います。もしも、１２人の子宝に恵まれた女性は、ツキ（月）の位として賞賛しましょう。また、三つ子を産んだ女性は三光のサイワヒ（幸せ）に浴するものです。ともに、ミカド（朝廷）に報告して下さい。賜物が齎されることになります』

こう言って、オシホミミさんは、ケフのホソヌノをヒタチオヒ（常陸帯）として、贈って下さるのでした。

一般の民衆も、オシホミミさんの温かなお気持ちにひたされて、自然に国の内も整って来るのでした。

やや、年月も幾そう重なって、フツヌシも世を辞（いな）む時期にもなります。フツヌシは、カトリのミチの全てのオクノリ（奥義）を、アマノコヤネに授けてから、死去します。また、タケミカツチも晩年になりました時にも、同様でした。タケミカツチは、アマノコヤネに、カシマのミチの全てを授けるのでした。さらに、アマノコヤネの実父のカスガトノ（ココトムスヒ）も、同様でした。カスガトノは、タマカエシのミチのオクノリ（奥義）等もすべて、アマノコヤネに授けるのでした。この結果、大半の深いミチの深奥がアマノコヤネの許に集中して集まることとなったのでした。

さて、ヒトリヒメさんと言う名前は、ちょっと変わっていますよね。その訳は、父親のタケミカツチの落胆に原因があったのでした。男の事が授かったとばかり思い込んでいたタケミカツチは、赤ん坊が女の子だとわかった時に、得も言われぬ落胆で気持ちが落ち込んでしまったのでした。名前を付ける気もしないのでした。ハハ（母）が頼んでも、名前を付ける気力がないのが意気消沈のタケミカツチでした。しょうがなくて、たった一人の御姫さんで、「ヒトリヒメ」と、呼ばれるのでした。そのうちに、また、産まれたらイミナ（まことな・実名）を付けよう。間違わないために。と、タケミカツチはいうのです。「ヒメカミ」「ヒメカミ」と、タケミカツチは、呼ぶばかりでした。

やがて、夫となった、アマノコヤネも困ってしまうのでした。イミナ（実名・まことな）も無いのですから、どう呼びましょうか？　やむなく、「ヒメキミ」「ヒメキミ」と、アマノコヤネは妻を呼ぶしかありません。そのうちに、あれやこれやの、ケフのホソヌノの大騒ぎです。名前もはっきりしないままに、ヒタチオヒ（常陸帯）の締め上げです。子種を授かる重大さについて、深く実感するアマノコヤネでした。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

17、かん かがみ やた の な の アヤ

時は、9代アマキミのオシホミミさんの御代となりました頃です。先のアマカミのアマテルカミは、政（まつり）ごとからはご引退なさいまして、人々の教育指導にお力を注いでおられます。

この日は、トミ（指導者）たちや、タミ（一般の国民）たちも、多くの人達がアマテルカミのヲウチミヤの前に集まっていました。ヲウチミヤの前にはヤタのカガミが据えられていまして、人々は有り難く拝んでいました。と言いますのは、ヤタのカガミとは、ミクサタカラ（三種の神器）のうちの、ひとつの宝物なのでした。一般の国民にとりまして、なかなか、目にすることも珍しいモノです。思わず拝んでしまう雰囲気です。

アマテルカミの許に、礼拝をしたアマノコヤネがかしこまって尋ねました。

『ヤタのカガミの大切なこと、これは、「ヤタ」と言う命名のいわれと何か関係があるのでしょうか？』

この時にアマテルカミは、「ヤタ」のいわれを詳しく説明なさったのでした。

『そもそも、「ヤタ」はヤタミ（全国民）の身長から名付けられたものでした。

むかし、「まはかり」と言う物差しが作られました。全国民約８０万人の平均身長の長さを表したのが「まはかり」です。今に、「ひとま」とも言うのが、この長さです。「ひとつほ」とも言います。

国民の平均の身長の「ひとま」、これを、ヤタ（8タ・8尺）に分けます。なぜなら、人の身体の構成要素の5要素のうち、ウツホは目に見えません。それで、見える要素は8割分であるため、「ひとま」を8等分して、ひとつを、「1タ（1尺）」と呼びます。さらに、目には見えない要素であるウツホの、日月の分の、2割分、「2タ（2尺）」を足して「たかはかり」の物差しと名付けます。

また、「タ（尺）」は、さらに10等分します。この、「タ」の10分の1の長さを「キ（寸）」と名付けます。

一般国民の平均身長はヤタです。8タ（8尺）ですね。背の高い人もいますし、背の低い人もいます。その、なれたけ（均して平均した背丈）がヤタと言うわけです。この「たかはかり」とは、なれたけ（均して平均した背丈）の平均身長を基にした物差しです。

世界を形造っている5要素のうち、目に見える要素は4要素あります。カセ・ホ・ミツ・ハニの4要素が目に見えます。ウツホは目に見えません。そこで、目に見えない分のウツホの2割分を継ぎ合わせて、曲げての物差し（L字型）が作られました。これがマカリサシ（曲がり指し）です。

（C）　池田　満

さて、このマカリサシ（曲がり指し）の長いほうを丸めますと、短い方が直径の長さに近くなります。この大きさに作ったカガミが、もとのヤタカガミでした。人の構成要素の内の、目には見えないウツホもちゃんと映し出せるようにと考えられたカガミ（鏡）です。全国民の平均身長のカガミですから、カミ祭りにもとても有効です。本来のヤタカガミはメグリ（円周）が８タ（８尺）もあるものでした。この大きさのカガミは製作も持ち運びも大変なことでしたので、直径を１タ（１尺）のカガミに作り変えて、ヤタのカガミと称するようになりました。

また、「ヤタ（ヤタ）」の「ヤ（ヤ）」には、神殿造りの建築物の意味も込められています。大昔のことです。「ム（ム）」のタミメ（文字の形状）に拠って住居の建築が発明されました。この住居（竪穴式住居）の建築方法をタミ（一般国民）に教えて、人々が安心して暮らしてゆける基礎が出来ました。

「ヤ」の根が出来たわけです。さらにそれから、「ヤ（ヤ）」のタミメ（文字の形状）からヤシロ（神殿造りの建築物）が建築されるようになります。今現在にはさらに大きな建築物になって、ミヤトノと呼ばれます。ミヤトノにも「ヤ」の意味が込められていますね。国民を教え導く「ヤカタ」の意味なのです。ヤカタの「タ（タ）」とは、教えの光が「ア」の丸い「ウツホ」の中に3本集中して入っている形状です。足らざるものを足して、教え導く精神を「タ」の文字形があらわしています。この「タ」の文字を、上下ひっくり返しますと「ラ（ラ）」の文字になります。「ラ（ラ）」は、光をあたり一面に及ぼし照らす状態を表した文字の形状です。土は植物を育み、母は子供を愛しみ育てます。「たらちね」の言葉は、このような意味の「タ（タ）」と「ラ（ラ）」を元としています。

さらに、「タ」の導き教える精神とは、「ヲシ（テ）」も同様ですが、父母の愛しみの精神であることが大切です。血縁の直接の繋がりは無くとも、父母の如きです。「チなきのタラ」と心得ると良いでしょう。このようにして、恵み教え助けて治めるタミ（国民）は、我が子のごとくです。

「ヤタ」の精神はこれを、「ヲヲヤケ」とも言えます。

古（いに）しえに、「ト」と「ホコ」が作られて、国を治めるべき象徴のタカラ（2種の神器）とされました。この、「ト」「ホコ」のうちの、「ト」とは「トのヲシテ」です。7代アマカミのイサナギさん・イサナミさんは、「ト」

無断転載を禁じます。

「ホコ」のタカラ（2種の神器）を受け継ぎました。そして、国民全体の親の気持ちになって、我が子を育てるように篤く教えて導いたのです。しかし、いくら親身になって教えても、ハナから逆らうようなことでしたら、仕方がありません。どうやっても、直らない大きな罪や、トガ（巨大な罪）のものは糾（ただ）してこそ世の平安が実現出来るのです。

しかしながら、そこに至るまでにも、導き方が充分であったのか？　常に反省の自問をしなくてはなりません。

トミ（指導者）たちには、何よりも教えることを常の仕事として下さい。わたくし（アマテル）には、トミもタミも、子や孫のように等しくいとおしく思えます。トミたちよ、人々を教え導いて下さい。端的に言うならば、教えぬものはトミとして問題です。

常に、アメノリを心に定めて指導に当たって下さい。そして、自分自身の身を修めて、田畑を耕して種をまき、草を刈ったり手入れをして、作物を収穫するタミは、わたくし（アマテル）の孫にも思えていとおしいです。その他の工業や商業に携わる人も、同じようにいとおしく、ひ孫や、玄孫（やしゃご）にも思えます。

「ヤタ」の意味のヲヲヤケを思って、目先の利得にだけ走るようなことはしないようにして下さい。重要な心がけは、「**屮**（ト）」の利他の精神です。

これが、「ヤタ」のカガミの意味するところです。

さて、災害の起きたり、飢饉になったりの時にはお互いに助け合ったりします。ところが、平和に豊かに安定した時期が長く続きますと、自己主張が強くなり、こころ（心・気持ち）が濃くなってきます。素朴な気持ちを忘れないようにしておくと、考え方の根底にズレが生じないモノです。何が大切か？　アメのミチの、この基本の価値観にズレが生じてしまうと、本末転倒に陥りやすくなります。この世に生れ出て、楽しみ生きて、花を咲かせ実を残して逝くのが本来の姿です。枝葉末節を取り違えると、他人を欺いてモノを奪い取ったり、また、悪さを隠し隠蔽しようとしたりします。でも、隠しおおせるはずもないのです。それは、万物は常に行き来しているからです。５要素の中でも、特にウツホの行きかいは滞りが少ないものです。それで、ウツホは、人体に形造られる際に「ココロハ」となるわけです。「ココロハ」の巡りは常に絶え間ないものですが、目には見えません。それは、ヒトがウツホの中に居るからです。逆に、水の中に居るウオ（魚）にはウツホの動きがよく見えます。水の中だとウツホの動きが見え、ウツホの中だとミツ（水）の動きが見えるのです。この二つは、相違うモノの相反の例えと言えます。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

カガミもこのような相反の作用があります。左手に持ったものが、カガミの中では右手に持っているように見えます。では、と、左へ押しやると、右に移って行きます。また、向こうへ持って行きますと、手前に近づいてきます。みなみな、逆にひっくり返った写しざまに成ります。これが、カガミを用いる理由においての重要な点です。逆に見える。この事です。

そもそもの、ヒトの成り立ちを考えてみましょう。モトモトアケ（宇宙の中心）に位置している創造神のアメミヲヤの存在があります。その外側は、トホカミヱヒタメの８神のヤモトカミが守ってくれています。さらにその外側は、アイフヘモヲスシの８神のアナミカミが守ってくれています。アナミカミは、「アワうた」の５・７調４行の、それぞれの頭韻を連ねた「あいふへもをすし」です。そのまた外周にミソフカミ（３２神）が控えています。ミソフカミは、ミメカタチ（人体の顔かたちや肢体など）を備えてくれます。ソムヨロヤチ（１６８０００）の諸々の物質を寄り添わせて、人体を形成してくれるわけです。ヒトのタマ（魂のもとの本体）が、宇宙の中心から分け降されて来て、ヤモトカミや、アナミカミ、さらにミソフカミが合わさってこそなのです、ヒトがこの世にて楽しく暮らす事が出来るのは、ですね。

さて、この世にての人体形成には、ソムヨロヤチ（１６８０００）のモノ（物質）が寄り添うのですから、それぞれ個体ごとに微妙にシナ（成り合わさり方）が違ってきます。それが、個性と言うものでして、得も言われぬ妙（たえ）の響きが備わるのです。それは、すべて、アメノミヲヤが守ってくれる範疇の中なのです。つまり、どの様な生まれつきの人も、すべてがすべて、アメノミヲヤの守りのうちなのです。

「ト」と「ホコ」を授与されて、国政の改革に尽力したことで、多くの物事について理解も深まります。それで、７代アマカミのイサナギさんとイサナミさんは、おっしゃいましたのでした。

「うつわもの　にふ、なれ、ときの
タミあるも　くつ（屑）をすてなて
にふ、ときを　ならしもちゐん
あめのこころそ」

ニフ、とは鈍き事で２０回・３０回ぐらい繰り返し説明して初めて解るような人の事です。

ナレ、とは普通の人です。１～２回説明したら解ってくれるのですね。

トキ、とは生き馬の目を抜くような、鋭（すると）すぎる人の事を言います。言わない前から、揚げ足を取ろうと全神経を集中するような人です。

ニフ、も、トキ、も、やっぱりちょっと問題なのです。でも、それはそれで、ちゃんとアメノミヲヤの守りの範疇にあるわけです。ですから、にふ、も、とき、もそれなりに長所を活かして役立つように配慮したら良いわけで

（C）　池田　満

す。これこそが、アメのこころと言えましょう。

わたくし（アマテル）は思うのですよ。良しも悪しも、その評価はある一面からのものに過ぎない、と。見方を変えると、良く見えていたものにも、欠点がある事に気付きます。悪いものにも、見方を変えると、長所が見つかったりします。このような発見は、楽しいことだと思います。ヒトというのは、一面での理解では収まらないものなのですね。ナカコ（こころの宿り所・心臓）には、建て前と本音のふたつが同居しているようです。ですから、悪事も露見するのですね。

マスカガミは、ヒトのこころの在りようを窺い知ることが出来るウツワモノ（器）です。

良くないことをすると、自然と自分自身の身に返ってきます。盗みとか、他人を謗（そし）ったり、脅したりすると、やがては自分自身に災いとして降りかかってきます。

他人への脅しなど、その時には即座の反応は起きなくても、やがて、他人からまともに相手にされなくなったりします。それが元で、病気にもなりますね。

盗みなども、他人に知られなければ、それで良かった儲かったと思っていても、やがては露見するものなのです。１回目がうまくいったら、２回目、３回目と盗みの回数を重ねてしまいます。盗みの悪事は、天然自然も他人もそれとはなしに知るものなのです。ウツホの息にあらわれ、ハニの足にあらわれ、他人に知られてゆきます。罪の露見で滅んでしまいます。罪の余波は親類にも及んでしまい、盗みを受けた人や、他人の利益が図られて喜ばれてしまいます。もうどうしようもありません。取り返しはつかないのです。

罪に落ち行く人は、調べてみると家庭の教育に問題が大きいようです。子を持ったら親としての心構えをよく聞いて欲しいものです。

環境の厳しい断崖などに育った松の木は、捻じれ曲がっています。根っこの方などは、蟠（わだかま）っていますね。人で言うなら、我が侭（わがまま）の言い放題で育てると、ミチ（掟・法）に反抗する蟠（わだかま）りの人間になってしまうようなものです。こんな、ぐにゃぐにゃ松は、薪にしか使えません。折角のタカラ物を無駄にしてしまうのは忍びないことです。シム（欲求・欲望）に傷みがちょっと来ているだけの障害に過ぎないのです。治るのですよ、これは。

子供をヒタス（教え愛しむ）ノリ（やり方）は、クセの強い松の木を直すやり方に似ています。断崖絶壁に生えている曲がった松の苗木を、穏やかな風土に植え替えてみましょう。そして、添え木や、適切な水遣り、雑草の除去など愛情いっぱいに育てると真っ直ぐな松に育ちます。

子供の養育も、親の愛情を注いで、「トのヲシヱ（ヲテ）」に基づいた教育で

無断転載を禁じます。

育ててゆくと、こころ正直な指導者にもなってゆきます。メクミ（恵み）に対して、報恩の心を知ることですね。アマキミ（古代の天皇陛下）からのメクミを知る能力が出来れば、人々の指導者の棟柱になれます。棟柱は人の住まいの上にあるわけです。

　ところが、目に見えての強烈な指導力を付けさせようと、強引な指導をすると、子供は拗け（ねち・ねぢ）けます。必然的に、こうなってしまうモノです。強そうな人には、おべっかを使う、キキスギ・ネチケです。強きに阿（おもね）り、弱きを挫く、拗け曲がりのハタレです。他人の顔色を窺う事ばかりを仕事にして、弱そうな人を見つけては、隙（すき）を見つけて強引な欲求を捩じ込んで行くハタレです。ハッタリ人間と言うと解りやすいでしょうか。

　その身一身で、大出世を遂げたような人は、特に注意をしてもらうべきでしょう。子供に、変な気風を植え付けると不幸せを招きかねません。と、言いますのも、例があったわけです。立身出世のその果てに、やり過ぎてしまったのですね、子供がホメスギ・ネチケになり、全国規模の騒乱が巻き起こされたのです。多くの命が故なく犠牲になってしまいました。このような事に対処するべくミクサタカラ（三種の神器）は必要とされる訳です。ですが、ツルギが要（い）り用に成る事態に立ち至らないように、したいものです。そのための、「トのヲシテ」であり、「カガミ」なのです。「トのヲシテ」だけでは、ミチが通りかねるところを、「カガミ」によって間違いなきように導きたいわけです。それは、人々の一人一人、それぞれが自立的にこころの在り方を直し修正できる。この最も根底からの修復原理が、「カガミ」によって実現できるのです。この、カガミによる自律的こころの修正は、永遠に意味のあるモノと言えるのではないでしょうか。

　ミホツヒメは、親のこころ遣いについて、まだ、良く理解が及ばないでいました。一人息子のためを思って、一生懸命に注意してやっているのに、それが、どうして悪いのだろうか？　もうちょっと、しっかりして欲しいから、あれこれ言うわけですよね。それがどうして悪いのか？

　アマテルカミは、声もさらに優しくおっしゃるのでした。

　聞いてもすぐには解らない子も多いものです。自分自身の時と同じだとは、なかなかそうでもないのですね。一回聞いて解る子もあれば、三回聞いて解る子も居ます。ですが、３０回聞かないと解らない子も、時には居るものなのです。聡明なミホツヒメ、あなたなら、一回聞いたら解りますものね。それが、不思議に、他の子はそんなことは、先ずはあり得ないものなのです。それが一般的なようです。

　それで、何回言ったらわかるの！　と、言いたくなるわけですね。その、語調が強さを増すごとに、子供の耳にどうしたことか防音壁が出来て来てし

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

まうようです。さらに、強く言って厳しく指導しますと、子供にとっては暴風雨に見舞われたように受け取り始めます。嵐が去るまでじっと我慢します。それで、曲がりくねって瘤だらけの松の木のようになります。そんなことが長く続きまして、成人するまでも続きましたら、素直で実直な人には成り得ませんです。親の良かれと思って言う強い指導の言葉も、鞭だと思うのですね。モノ解りの遅い子などは、荒れ狂う嵐の鞭の痛さからどう逃げようかとばかり考えます。鞭から逃（のが）れるために、正直さを放棄するのです。解っていない事でも、解ったように取りつくろいます。それを、親が見抜けないで、空喜びをしていますと、子供はそのようにばかりして行くものです。いい子ぶっての行き着くところ、これが、聞き過ぎネヂケ（拗け）のハタレです。

聞き過ぎネヂケ（拗け）は、とくに間違いに陥り易いところです。モノ解りの遅い子には、特にゆっくりと時間をかけて、事細かに教えて行きましょう。毎日毎日、少しずつ繰り返して教えて行くと、ひと月もしたら、一つや二つの文字を覚えてくれます。さらに、月を重ね、年を重ねて行くと、４８音の成り立ちにも理解が及ぶ事でしょう。初めに、こう言っておいたから、もう解ったはずだ。と言うのは、即断に過ぎています。１００回か１０００回教えても、猶（なお）解らないのだったら、教える側はイライラしますよね。それでしたら、イライラを治めるために、杖でそこら辺をバチバチ叩いて下さい。すっとします。そうしましたら、また、一から戻って、平静にまた教え始めて下さいね。教える人の手には、松の小枝のシモトツエ（シモト杖）が良いですね。子供を真っ直ぐに育てようとする精神が、シモトツエ（シモト杖）に備わっています。節瘤だらけの松の木にしてはならない、その精神です。春の気持ちの雰囲気で、タ（春・温かい・左）の気持ちで子供に接する、そのための、教える人の気持ちを保つためのシモトツエです。そうしまして、１０年もしましたら、もの覚えの遅さや、もの解りの鈍さにも、直って来る兆しが出て来ます。３０年もしましたら、びっくりしますよ。真面目な子供は、解りだしたら早いのです。急に自分から学問に熱中し始めますからね。そのような事で１００年も経ちましたら、立派に家を支える柱に成ります。３００年も経ちますと、梁（はり）の大きな材木にも使えるように成ります。５００年にもなりますと、棟木（むなき）にも使える事です。これは、木材の生育の事でしたが、人の育成にも、ようよう似てもいる訳です。

ヒト（人）の場合は、次のように成りますでしょうか。１０年で大体の基礎が出来て来ます。３０年で梁（はり）に使える人材に成長出来ます。５０年で棟木（むなき）に使えるまでに成長を遂げる事でしょう。

とにかく注意してもらいたいことは、いつもいつも、温かい視線を向ける事なのです。投げ遣っての事や、早知りを空喜びするような事を、間違って

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

もどうかしないようにして下さい。これが、ヤタのカガミの精神なのです。万民の全てが、アメミヲヤの賜わりモノなのだ、と言う理解です。

わたくし（アマテルカミ）が、ミクサタカラ（三種の神器）にカガミを追加したのは、この精神に依るからです。わたくし（アマテル）も守り、アメ（アメミヲヤ・創造神）も、天下万民を守るからなのです』

アマテルカミは、このように、ヤタのカガミの意義を説明したのでした。

この場にいて聴いていたタチカラヲは、アマテルカミの前に進み出ました。そして、簡単な質問を発します。

『ヌスヒト（盗人）の罪が、3回目に知れてしまう。そして、ツチで罪を打たれる。ということですが、どうして、3回目になって罪の露見が起きるのでしょうか？』

アマテルカミは、あ、3回目の事ね、と、呟（つぶや）きになられました。そして、頬に笑窪を浮かべられて、話し始められます。

『3回目の事ですね、複雑なところもありますので、ゆっくりと、考えてみましょうね。

まず、ヒトとはどんなふうにこの世での生活をしているのか。ここから考えてみましょう。

地方地方には特色があります。クニコトバ（方言）もいろいろクニによっての違いがあります。また、何が良いことか、何が良くないことか。そういった習わしの善悪判断も地方地方で少しづつ違いがあります。それは、風土に違いがある事もあり、クニカミ（後の国司）の人も違うからです。

そのクニに生まれて、そのクニの風習に馴染んで、ヒトは生活します。幼い時に、別のクニに住み替えをしたら、その子は、その移転先のクニの風習に馴染んで行きます。それは、こう言う事ですね、ヒトとは、言葉を持ってウツホ（気体）のうちに住んでいる。この、言葉を持っている事が、とても重要なのです。そして、常に地面を踏んで歩いています。悪事がアメ（天下）に知れ渡るには、ウツホとカセとハニに伝達するわけです。ですが、2回までの悪事はカセとハニ（ツチ）のカミが猶予してくれて告げないでいてくれるのです。つまり、悪事はウツホに出て、カセにて常にアメに伝達はされるものですが、露見の決定打にはなりません。それは、クニが違えば善悪判断の基準も違うような、気体のように緩やかなものであるためです。さて、2回目の悪事では自分の身体に影響が及んで来ます。背中が丸まって来るように、姿勢に変化が出ます。姿勢の変化は、歩き方が抜き足差し足忍び足の変な足取りに成ります。それで、悪事をした事が、ハニのツチのカミに知られてしまうのです。幸いと言うべきでしょうか？　ハニ（ツチ）は動きに乏しいからでしょうね。ハニ（ツチ）のカミはたとえ知っても、アメ（天下）には知らせずに猶予をしてくれます。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

さて、悪事の3回目はどうなりますか。それは、自分自身のムネ（胸）に響いて影響が出て来ます。ムネにざわめきが起きます、そうしますと、言葉の声に震えを生じます。ミメ（目や表情）にもムネのざわめきが現れます。そうしましたら、親や一家の主（あるじ）の知るところとなるわけです。問い詰められても、諭されても白状しないで頑張っていても、本心からの真剣な本音で問い質されたら白状しないわけにもいかなくなります。他の人からの訴えにも、露見するものですが、すべての人はアメミヲヤの分霊であるわけですから、根本の護られたところがあるのです。それで、少しのところは猶予がされるのです。ですが、タマとシヰの合体で出来上がっているタマシヰの、シヰの部分が反応してアメ（世間）に露見してしまします。そして、キミ（天皇陛下）にも告げが及んでしまうのです。

アメツチ（天然自然）の中にいて、アメツチ（天然自然）から出来ているヒトだから、悪事も自然と露見するものなのです』

それで、3回目と言うわけか。と、納得したタチカラヲでした。

さて、その場でじっと聞いていたハルナが、質問しました。

ハルナは、昔、ハタレの騒乱の際に乱に加わった人物でした。ハタレの6群団のうちのひとつの首謀者でしたが、強い大きな勢力を持っていました。ハタレたちのうちで、たった一人ハルナだけが、アマテルカミと直接戦闘をしたのでした。今では、許されて、アマテルカミの許に参向していました。今の群馬県のあたりに住んでいたのでしょうか？　ハルナの話す言葉は、クニコトバの特徴の強い言葉でした。榛名神社は、群馬県高崎市の山深い榛名山の巌の山中あります。

ハルナの独特の話しっぷりは、直（じか）に読んで見て下さい。

おおよそは、先のハタレの騒乱の際での事で、試みが1回目・2回目・3回目にての後で果てて企（たくら）みが崩壊したのは、どう言う訳からだったのか？　を聞きたかったようです。

アマテルカミは、さらに、にこやかなお顔で、ハルナにお答えになられます。

『そうですね、あのハタレの混乱の時には大そうな騒ぎに成りましたね。あなたの率いる軍勢と、戦闘した日の事が想い出されます。でも、そもそもの処を考えると小さな思い間違いが原因だったに過ぎないのだと考えています。それは、張ったりのハタレの行為自体が自ら自分自身に災いを招いていただけなのでしょう。言うなれば、自業自得なのです。その理由（わけ）を説明しましょう。

ひとことで言えば、結局のところ、盛りの喧伝で他人を欺いた事になったのです、その、欺きの報いが戻って来たわけです。大風呂敷を広げ過ぎたばかりに、泡が弾け潰れて消えたようなモノですね。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

わたくしの観察し見るところ、ヒトのこころの成り立ちには色々な働きのモノが寄り集まって形を成しています。ミヤビはこの中でも中心的な存在といえます。ミヤビは知る働きです、意識と言ってよいでしょう。ミヤビの派生の働きにナサケのエタ（枝）があります。これが、直接に人体に作用します。

大宇宙の中心から降されて来たタマが、地球のシヰと合わさって、イノチ（生命）が起きます。また、タマが主体になってナカコ（心臓）が発生します。さらに、キモも生じます。

シヰは、大きく分けてネとハとに働きを為し行きます。シヰのネは、自らの生命維持の働きです。内に向く生命維持のモノです。シヰのハは、外界に対して働く生命維持の部分です。シヰが主体になって造られたものがムラト（腎臓）です。

また、ココロハは、フクシ（肺）を造ります。

「ヨクラヨコシヤ　ネノムクラ」【詳細は未詳】

そう言う事で、人体の形成がなされる訳ですから、ミヤビは人体のすべてに通うのです。そうして、モノを知る働きをするのです。具体的には、ミヤビの派生物であるナサケが、ナカコ（心臓）に直接作用して、人体の各部位に影響を及ぼします。

さて、人体とはこんな成り立ちであることを、踏まえた上で考えて下さい。

たとえば、狡賢い人が賄賂を贈って自分の土地を多くせしめようと悪巧みを考えたとしましょう。親しいトミが目先の欲に釣られて、賄賂を受け取って土地の境界線を誤魔化して奪わせます。そうしますと、土地を取られた側がよっぽどに怒ります。取られた人に親しいトミに訴えます。さて、そのトミ達の指導に当たるクニカミなどの知るところとなり、詳しい事情の調査が行われます。誤魔化しの不正が明白となって、正しく元に戻す事が宣言されます。さて、土地を取り戻したタミは喜びます、が、不正を暴かれたタミと、トミは逆恨みをします。トラブルがまた起きるわけです。さらに、キミ（天皇陛下）にまで問題が知られて仕舞います。トミの地位を悪用しての職権乱用罪の露見に至ります。受け取った賄賂は、損害を受けた人々に分配する事で、一応許されますが、さらに、今後の悪事を働かない事の誓いが必要になります。

このようないざこざの時も、世間的な制裁だけに止（とど）まらずに、悪事は自分自身の身体を痛めつける事にもなっているのです。

悪事に染まり纏える事になると、ミヤビが既に知り解るのです。それで、即座にミヤビから、ナカコ（心臓）に悪影響が及びます。他人に悪さを働いた時には、自分自身のナカコ（心臓）に痛みを覚えるものです。他人を謗りましたらウラミを買ってしまいます。盗みをすれば、オシム【詳細は未詳】

（C）　池田　満

をなしてしまいます。損ないは、シムに傷みが生じてしまいます。いずれも、ココロハは常に廻っているので、為したる悪事が自分自身の身体に悪影響が出るわけでして、これを、アワレの働きがミヤビへ知らせ、そして、ナカコ（心臓）に伝わります。

例えば、他人同士の諍いでも、見たらば心が騒ぎます。他人が、他人を悪しざまに撃ったり、叩いたりしていたら、見ていただけでも心にざわめきが起きます。他人が他人を殺したりしているのを見れば、こころがもっともっと動揺しますでしょう。それが、ナサケの働きです。他人が転んで痛がっているのを見たら、自然に助けようと救いの手が伸びますね、これはアワレの働きです。ナサケと同じでミヤビからの派生のもうひとつの働きのエタ（枝）です。アワレが増して来ますと、そもそもの人の成り立ちに準拠して、ミヤビを通じてムネ（胸）に影響が及びます、それで、ア（天・外界）からのヤ（糺され）が無くても自然に自らの身が治まるわけです。

また、自分自身から出た良くない事でも、同じように巡ります。たとえば、オコリ（驕り）のこころが起きた時、欲しい欲しいの気持ちが特別に強く沸き立ちます。アチ【詳細は未詳】もイロメ【詳細は未詳】もヨコシマになります。それで、シヰの強過ぎが起きて、アヤ（外界からの矢・咎め）が起こってしまうのです。自分自身の身が亡んでしまいます。強過ぎの欲求のホシ（欲しい欲しいの心）を、濯ぎ清めて、通常のレベルまで戻したら日常生活に支障ないように成ります。それで、イセのミチに、円満な夫婦生活も出来ると言うモノです。

我から我からと、イサムのこころが激しいヒトは、他人の功績までねじ曲げて自分の手柄に盗み言うようになります。それは、自分自身のココロハが素早く知るところとなります。ココロハは、この事態をミヤビに知らせます。ミヤビは自ずからに5クラに告げます。5クラには、あれこれと揺らぎが発生します。それはさらに、ミメ（目や表情）にも、悪影響が現れます。コトハ（言葉）にも悪影響が現れます。身体の姿勢も背中が曲がってしまい、歩き方も、抜き足差し足になります。抜き足差し足は、地面に伝わり、やがて、天下万民に知れ渡ります。もう、ミヤビが枯れてしまった状況です。ミヤビがカラカラに枯れてしまうと、トキ過ぎ（馬の鼻先も掠め取る）のハタレになります。こころにも、ミ（身体）にもワサ（禍の元・悪さ）をしないようにするべきです。

むかし、わたくし（アマテル）の遭遇した事例でもほんとに困った事がありました。こころの奥底に間違いを持ってしまっているヒトです。ちょっとやそっと、言い聞かせたぐらいでは、こころの過ちを悔悟出来ないひとです。国家の主要なキーパーソンからの除外を決断した、そんな事例もありました。長年の、本当に長い長い年月での間違い探しをして貰わなくてはいけない人

もいるわけです。

結論を言いましょう。

ミヤビこそが、無くてはならない大切なモノです。

物欲に、権勢欲に、褒められ欲などに、取り込められてしまっては、結局のところ自分自身の身を滅ぼしてしまいます。他人を褒め認めてこそ、自分の存在も他人の理解の対象になるのです。ミヤビのこころが皆無だと、結局は、自分自身の存在が外界に認証されるところとはなり得ないのです。そんな事では、楽しい嬉しい等の気持ちも砂粒を噛むような、味気ないものです』

アマテルカミのお言葉を聞いていたハルナも、じっくりと、解ったのでした。他人の弱みに付け込んで、少しの言動で悪く悪しざまに陥れて目先の利得を図っていたことが、やがては、大きな反動が起きて、わが身に罪悪の報いとして不幸が降り注いで来たのですね。他人を悪しざまに隠れて言うひとことの癖が、大きな災いの元だった事が解ったのでした。

この時に、静粛の時間が流れました。他人を良くしよう、とする、「トのヲシテ」、これは良い方向に好循環をします。それがまた逆に、他人の不幸を喜ぶ逆向きの方向性は、小さな事でも後の大きな災いにと戻り返って来ることが、理論としてロジックとして明らかにされたのでした。人々は、自分の胸に手を当てて考えてみるのでした。

そうこうしています内に、一人の人が、居ずまいを正しました。それは、アマノコヤネでした。アマノコヤネは、ミクサタカラ（三種の神器）を９代アマカミのオシホミミさまに届ける重要な仕事を委任された人物でした。アマノコヤネは、神妙な面持ちで申し上げます。

『成る程、そう言う事で御座いましたですか。

さてそうしましたら、ヒトの成り立ち来るその大宇宙との関連のところの事は、いかがなのでしょうか？　もともとのアメミヲヤからの守りが人には有ると、言われておりますが、どのように関係するのでしょうか？』

アマテルカミは、この深い質問にもお答えになられます。

『そうですね、ヒトと大宇宙との関係について、考えてみましょう。

そもそも、ヒトの形態はアメ・ツチの形になぞらえて創られているのです。ヒトの頭上に広がる空は、大宇宙でのタカマノハラ（遠大な宇宙空間）に相当します。ヒトの目と鼻は、大宇宙でのヒ（太陽）とツキ（月）とホシ（星）に相当します。５クラと６ワタは、大宇宙でのクニタマ（地球）に位置します。また、５クラと６ワタのそれぞれの臓器などは、クニを治めるミチにも該当します。ナカコ（心臓）はキミ（古代の天皇陛下）に相当します。キモ（肝臓）はトミ（中間リーダー）に相当します。ヨコシ（脾臓）はタミ（一般国民）に相当します。フクシ（肺）はカキ（警察官などの治安維持の人たち）に相当します。ムラト（腎臓）はナラス（生じさせる・カガミのトミ）

に相当します。

それでなのです、メツケ（目付け）の働きのカガミのトミの臓器から、悪さ・悪事はミヤビに告げられます。フクシ（肺）の前に構えるほどの、暑い・寒いの事があったとしましょう。そうしましたら、コロモ（衣服）によって防御しますね。でも、その心地よさに浸っていると、そこに頼りっぱなしになってしまいます。それは逆に、「カ（暑さなど）」を回してしまう事になります。甘きこと、心地の良すぎは、ヨコシ（脾臓・タミ）が貪りに陥ってココロ（心）を刺してしまう悪影響があるのです。

つまり、ムラト（腎臓・左のトミ）のイキは、春の頃の物事の生まれ発展する方向の事です。この、ムラトのイキが過分に巡ると、イロ（男女関係）に捉われ過ぎて、肉体を、健康までもを消耗し過ぎてしまいます。

これら、全体のバランスを上手く保つことが重要です。これに役立つのが、ヤタのカガミです。ヒトは、大宇宙の形に準えて成り立っていますから、その元の形にと整えれば良いのです。ヒトの身体の中心である、ナカコ（心臓）に悪影響を及ぼさないために、ココロ（心）整える、そのためのヤタのカガミです。ナカコ（心臓）の形は、カガミなのですね。

誰にも見られていなくても、盗みなどの悪事を働いてはいけません。それは、自分自身の成り立ちの元のところでは解るわけでして、やがて、悪影響が自分自身の身体に現れ来るのです。誰に見られていなくても、誰に知られていなくても、やがては、露見します。アメ（天空・天下）には「イ（心）」によって知れます。ハニ（地面）には歩く足からバレてしまいます。ヒトにも告げられて知れ渡ってしまいます。この、３方向の報知・告知の事から社会的なヲヲヤケでの罪になってしまいます。そうしましたら、最早逃れるすべはないのです。

常に、心して下さい。いつも、何らかの事からでも露見はするものです。ヒ（太陽）の巡りのあるヒル（日中）は、明るいので人にもすぐに悪事は知られます。それで、「カガミ」の「カ」なのです。ヨル（夜）には、何処でも見渡せる明るさがありません、それで、「カガミ」の「ガ」です。

問題が起きないようにと、温かな気持で見つめるのが、アメミヲヤ（創造神）のアメのココロです。それが「カガミ」の「カ」で見る見方です。歩き方がおかしいと、地面に響いて知れるのは光の通らない所に知れるわけです。これは、光の不透過ですから「カガミ」の「ガ」ですね。それら、人知の及ばぬところのモノが、ヒトの「ミ（身体）」を通して天下あまねくに知れ「ミ（見る）」られるのです。こう言う意味で「カ」と、「ガ」と、「ミ」との三つを合わせて「カ・ガ・ミ」と名付けたのです。

さらに、「カガミ」には、「ヤタ」と名付けたのです、「ヤタ・カガミ」です。この、意図するところは、キミ（天皇陛下）が「ヤ」の「ヤシロ」のミヤコ

（首都）にいて、国民全体の「タミ」の「タ」に幸せを齎すために照らそうとします。国家を建て、国民にメグミ（恵み）を及ぼし、治安を維持して、マツリコト（政り事・政治）を執（と）ります。全国の四方八方すべてに渡っても照らし恵もうとする、この、ココロから「ヤタ」と言うのです。

なお、なお、自分自身の「ミ（身・身体）」の清らかさ正しさの「サ」を、どうやって行けばさらに「メクミ」を麗しく享（う）ける事が出来るか？　深く学んで知る事が、「ヤタ・カガミ」で出来る事でしょう。この事を、強く願っています』

この時に、アマテルカミは、にこやかにほほ笑まれたのでした。

昔にはハタレに加わって自分自身もつらい思いをしたハルナも、やっと、顔がはればれとしました。そして、ハルナは申し上げます。

『ハタレの騒乱の際に、６群団の一員として、罪を受けました。それが、許されてすでに長い年月を経て来ていましたが、本心のココロの奥底では大きな大きな悔悟の悩みがずっとありましたのでした。それが、今、漸く堅い大きな凝り玉の割れ去り崩壊する心地がしましたです。今からでは、既に若くもありませんので塔が立っていて、直りようも難しいのでしょうけれど、何とか努力したいと思います。また、これから育つ若い人たちに、私の失敗の経験を知ってもらったら、間違いに陥らないような参考には十分なる事だと思います。今日の学びは、誓いを立てるのでした。

と、ハルナは、誓いを立てるのでした。

また、タチカラヲも、深い理解を得て申し上げます。

『ヰ（た、はる）を ヰ（に、足すこと）にプラスする事の深い意味での ヰ（てて、父親の役割り）だと言う、極めて難解な哲理をアマテルカミからお諭しを得て、ヰヰ（たま）の ヰヰ（ゆら、齎され振り分け）を聞き得ました。それで、ヰヰ（みつ、生じて集まる）の三段階の真理の事、カカン・ノン・テンが理解できたのでした。それで、カガミがとても大切であると、はっきりと得心したのでした。

妬（ねた）みの成り果てのイソラが襲って来ましても、もう、怖れる事はありません。妬みが束になって欲しい欲しいの狂犬のように迫って来ても、本筋が解りましたので、ちゃんと対処が出来るように思います』

この、タチカラヲの誓いの言葉を聞いた、アマテルカミも満足げです。

コモリは、勉学して身に付けて、長年携わって来た医術・医業の観点からの創意工夫を考えました。コモリと言いますのは、アマテルカミの曾孫（ひ

まご）に当たる人物です。（アマテルく妻はハヤコ>ータケコく夫はオホナムチ>ークシヒコく妻はミホツヒメ>ーコモリ）

コモリは、また、申し上げるのでした。

『長らく考えておりました事で、ひとつの病気の治療に応用できるかも知れないと、気が付きました。それは、フクシ（肺）の病気のことです。フクシは、他人への思いやりの気持ちが強過ぎるので、自分自身への活力が必要以上に少なくなってしまい、病になるのです。いくら、他人への思い遣りの気持ちが大切だと言っても、自分自身の健康を確保した上での話ですね。自分自身の健康が基本にあって、その上での他者への心配りです。これを、間違って逆転させる事が、フクシの病の元です。これを直せば、フクシの病からの治癒も出来る事でしょう。

また、他にも、病の予防や治療に役立つ事がありましょう。

ことわざにも、「イロ・ホレも、ミチ（道）もて為せば、過たず」と言います。ちゃんとしたミチを通せば問題は起こらないのですが、ついつい近道をしようと、手抜きをしますと、問題や病を起こしてしまうものです。欲しい欲しいのこころを、少し鎮めて、家業の生業のミチに正面から向き合うのが良いことです。目先の不景気などで、懐具合が苦しいからと言って、悪事を働くような仕事や取引をしては、やがては、不幸がわが身に返って来てしまいます。

医業に長年携わって、わたくしは、常に思うのです。

ヒトのイキス（呼吸）はこのように有るのだと。それは、タマス（騙す）ことをすると、フクシ（肺）にもイロ・ムラト（生殖器・腎臓）にも障害を与えます。また、ヌスミ（盗み）をすれば、キモ（肝臓）に障害が出て来ます。そうしますと、ナカコ（心臓）が驚き動揺して悪影響を受けます。重症な病に至るものです。

でも、今、アマテルカミの人体成り立ちの分析のお話を承って、はたと、思ったのでした。

重症な病に至る前に、ほんの少しの間違いの時に改める事が可能になるからです。小さな間違いが身体などに感応して、ミメ（目鼻や表情）に出た時、言葉に出て来た時、イキス（呼吸）に出て来始めた時に、直してあげるようにしたら良いわけです。そうしましたら、元気に働くことが出来て、豊かに幸せになれるのです。医術もそうです、病を直すこともちろん大切ですが、さらに、病気の予防を図って行く事こそが、人々の幸せに寄与します。これからは、この点についても導いて行きたいです。これを、強く誓います』

コモリのこの誓いを聞いたアマテルカミは、お褒めになります。

『あなたの考えは、とっても良いです。

全国各地に、巡り見て人々をより良く指導してやって下さい。元気に楽し

無断転載を禁じます。

く働いてこそ、幸せなものです。それで、さらに豊かにと幸せにと導いて下さい。ほんのちょっとの暇を見つけては、出かけてやって下さいね。むかし、我が厳父のイサナギさんのミウタがありました。

つちかふは　みのあしはらも
みつほなる　たみとなせとみ
とみとなれたみ　』

そう、おっしゃったアマテルカミは、遠く雲の上を眺められたのでした。集っていた人々も、７代アマカミのイサナギさまのご功績の数々を思い出すのでした。

アマノコヤネは、このイサナギさんのミウタの解説を人々に語ります。

『イサナギさまの、このミウタには心打たれます。その、要点を述べてみたいと思います。イサナギさまの多くのご功績のうちで、特に新田開発の事が想い出されます。国民の一人一人にも、おん親（みずか）ら、素直さの大切さを教え、ワサ（仕事のやり方・業）もお教えになって行かれたのでした。そして、新田開発を進めになって各家々も栄え発展しました。そして、全国規模にも農業生産を飛躍的に改良増収に導かれたのでした。この時に、このミウタをイサナギさまがお詠みになって、スローガンになさったのでした。

新田の新規開発には、色々な技術や社会的な有機的繋がり方も必要になります。秀でた才能を発揮する人が出たら、指導者のトミにしましょう。それが、貧しい家の出であったとしても、何の障害もありません。必ず、アマカミ（古代の天皇陛下）からのヲシテ（信任状）が届くことでしょう。

この精神を、表したのがイサナギさまの、このミウタです』

いとも、麗しく尊く、かけまくも有り難いことか。畏（おそ）れみに、思わず衣服を整え直す思いの人々でした。そこここで、「あな（何と！）　有り難や！」と言う声が聞こえて来ました。「あなにゑや」と言う、イサナギさんの時代の褒め言葉も聞こえて来ます。「あなうれしや」と、言う声も聞こえます。アマテルカミの許から各家へと戻る際に、人々は何回も拝んでから去って行くのでした。何と、有り難いメクミ（恵み）であることか、と。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

１８　おのころと　ましなふ　のアヤ

天下があまねく、穏やかに豊かに治まった頃の事です。気候も穏やかになり、世間の雰囲気も波風なく静穏な状況になったときでした。アマテルカミは大きな巌で有名な場所に御幸をなさいました。今で言いますと、ピクニックに出掛けたようなところです。残念な事に、この巌の場所が何処であるのかは未だ未詳です。

さて、大きな巌の処に到着しましたら、噂どおりにしっかりした立派な小山のような岩でした。

アマテルカミは、茶目っけを表されました。日常の忙しい政務や教導に、一区切りを付けて、遊びに来られたわけでしたから、のどやかな日です。大きな立派な岩を噂どおりの立派なモノだと見て取ると、アマテルカミは、にこっとされました。そして、巌の上にお登りになりました。

『これこそが、オノコロの形だ』

と、おっしゃいますのでした。

『えー？　どう言う事なのでしょうか？

岩と、オノコロと、

どう言う関係がありますのでしょうか？』

ご高齢のアマテルカミが、たったったっと、巌に登って行かれるなど、珍しい事でしたので、見守る人々は興味津々です。

アマテルカミは、巌の一番高い所にお座りになりました。

さて、アマテルカミのお孫さんに当たる青年のニニキネさんが仰ぎ見て謹（かしこ）んで言います。青年ニニキネさんは、アマテルカミの薫育を最も受ける人達のうちでも指折りに入る人です。

『大きな巌に似ている、とおっしゃいます、そのオノコロとは、どの様に似通っていますのでしょうか？』

アマテルカミは、孫の青年ニニキネに説き始めになられます。

『「オノコロ」の意味は、歴史的に見ても、何段階にも重層関係が起きて来ています。それらの内でも「オノコロ」の意味が、もっとも端的に解りやすいのは、わたくしの両親の７代目アマキミのイサナギさん、イサナミさんの時のことでした。

通称として「フタカミ」と、言われますのがイサナギ・イサナミさんです。イサナギさんとイサナミさんは、「フタカミ」が通り名になってしまっています。その理由は、とっても仲良しでもあった事もありますが、出身の母体がそれぞれに立派な根拠を持っていた事で、「フタカミ」と呼ばれて行く成り行きに自然となって行ったのでしょう。いまでは、「フタカミ」と聞くとイサナ

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

ギ・イサナミさんの事を、真っ先に思い浮かべます。その「フタカミ」の名前が通り名となる主因が、実は「オノコロ」だったのですね。

　世の中の混乱が目にも余るようになって来た頃に、イサナギさんイサナミさんの「フタカミ」はアマキミ（古代の天皇陛下）の位に就任したのでした。どうやったら、国民に安定と平和と幸せを取り戻してゆく事が出来得るか？それには、このもっとも大切な根底を為すための根拠には「言葉」の改め直しが、どうしても必要である、と見定めになられたのでした。

　混乱のさなかには、兎角、目先の事に左右されやすいものですが、「フタカミ」は遠望に間違い無きを見定めての社会の根底作りから取り掛かったのでした。

　当時はあらゆることが、混乱を呈していました。皇族外の人に皇位の継承がなされようとする、ウキハシ（仲人の中でも最大の役割）が行われたのでした。それは直接の世継ぎ子が、6代アマカミには出来なかったからについての特別な措置でした。6代アマカミのオモタルさんとカシコネさんは、トのヲシテ（現代に言う憲法）と、ホコ（のちのツルギ、警察権・裁判権）を、次代に皇位を引き継ぐときに授与したのでした。イサナギさんイサナミさんは、7代アマキミの即位に当たって、トのヲシテと、ホコとを受け頂いたわけです。トのヲシテと、ホコは、いわば二種神器です。ホコによって、治安の回復を図り、それで人々の信頼を勝ち取っていったのです。初めに治めて行ったのは、琵琶湖沿岸のクニからでした。また、国家再建の中心に「アワウタ」を教え広めて行くのでした。これが、「おのころ」のクニの再建を果たす根拠となりました。

　「おのころ」は、歴史的に見ますと、4段階に渡って重なり膨らんだ言葉です。

　先ず、初めの「（オノコロ）」とは、じつは、天地の始まりの時を表現した言葉でした。このことから、解き明かして行きましょう。

　天地に充満する物質が、未だ何もない時の事でした。それはそれは、最も昔の原初状態の時の事です。「（アホ）」の気体の大元もない時、「（ウヒ）」のエマルジョン状態の物質もない時、そんな始めの時、アメミヲヤが始まりを起こしました。アメミヲヤは、「（アテ）」の「（ア）」の構造を創ります。これが、大宇宙の初源です。そこから、ウツホ（気体）が止めどもないほどの量が吹き出（いず）るのでした。そして、大宇宙の隅々

無断転載を禁じます。

まで巡り行きます。やがて、気体の中でも冷たいモノの「（ウヰ）」と、暖かいモノの「（ウヌ）」が分離してゆきます。「（ウヌ）」に、根源から噴き出す「（ア）」が多く混ざって来まして、「また、（アマ、天空）」が創られます。また、「（ウヰ）」に、根源から噴き出す「（ア）」が少なく多く混ざって来ましたら、「（ウヒ、初源のドロドロの固まりの働き）」になってきます。そうして大きな固まりが生じまして、クニタマ（地球）になりました。

また、別の働きの「かて（明るく光るモノ）」が生じます。「かて（明るく光るモノ）」のその中での最も熱く輝くところが集まって「（ヒ、太陽）」が出来ました。「（ヒ、太陽）」はアカキミチを巡る「（アカミヤ）」に配置されました。また、別の働きの「（シテ、白く冷たくなるモノ）」が生じます。「（シテ、白く冷たくなるモノ）」のその中でも最も冷たいモノが固まって「（ツキ、月）」になりました。「（ツキ、月）」はシロキミチを巡る「（シラミヤ）」に配置されます。さて、今度は「（ウヌ）」の「て」と、「（ウヰ）」の「て」です。動きですね。原初に発生した気体のうちで軽いモノ「（ウヌ）」は、「ウツロヰ」を生じます。これが、アメミヲヤの乗るムマ（馬）になります。原初に発生した気体のうちで重いモノ「（ウヰ）」は、「シナト」を生じます。これは、アメミヲヤのムマ（馬）に付けるクツハ（轡）になります。「シナト」は雷鳴を生じます。稲妻の光がさしずめムチ（鞭）の役割になります。アメミヲヤは、「おて（固めて安定させる働き）」を以て当時ドロドロだったクニタマ（地球）を、「ウツロヰ」のムマ（馬）に乗って巡ります。この時の、音

（C）　池田　満

が「𐐁𐐂𐐀𐐁（ホオコホ）」と鳴るのでした。この「𐐁𐐂𐐀𐐁（ホオコホ）」の音が、最も初めの「𐐂𐐀𐐀𐐅（オノコロ、自ずからに纏まる）」です。ナルカミ（雷鳴）の音が「𐐁𐐂𐐅𐐁𐐂𐐅（ホオロ ホオロ）」、そして、「シナト」のクツハ（轡）の音が「𐐀𐐂 𐐀𐐂（コオ コオ）」です。それが合わさって、「𐐁𐐂𐐀𐐁（ホオコホ）」と鳴るのです。まだまだ、クニタマ（地球）は熱くドロドロの状態でした。火山の噴火も絶え間なく起きていました。そこに、アメミヲヤは「𐐀𐐄（ノテ）」の働きを及ぼしていったのです。「の」の固める作用の「𐐄𐐇（カセ、繋がり変化させる、風）」が吹きますと、クニタマ（地球）の表面が固まってきました。堅いところには足跡が付きます。アメノミヲヤの乗るムマ（馬）のヒツメ（蹄）が跡となって残ります。窪（くぼ）んだ所、野らとなったり、道となりました。そうしますと、クニタマ（地球）の熱が和らぎます。すると、「シノタマ」の「𐐅𐐃（ツキ、月）」から、沢山の「𐐃𐐅（ミツ、液体、水）」が滴り流れ降って来ました。この多くの「𐐃𐐅（ミツ、液体、水）」が湛（たた）えられて海になりました。こうして、ツキの「カノミタマ」は、固まって来たクニタマ（地球）に「𐐇𐐅（ヨロ、良き根拠）」を乞うのでした。

（以上が、1回目の「おのころ」）

それで、「うわ」の「て」の力が働いて、「わ」と「あ」のそれぞれに分かれたモノ、また、「あいうえお」の状態の備わりがおきます。「うつほ」「かせ」「ほ」と「みつ」「はに」が混じり合って、初発の人類のミナカヌシが生まれました。それからは、クニタマ（地球）のあちこちに、人類が生まれ増えて行きました。ヒトはホシ（星）のようなものですね。他の動物とそんなにも違わないような、文化も文明も未発達でした。それは、「うくめく」状態です。取ったり取られたり、暴力が物事を決定するような、文化以前です。そこに、

無断転載を禁じます。

「トコヨ」のミチを教えるカミ（指導者）が出現したのでした。クニトコタチさんです。「トコヨ」のミチ（トのヲシテ）を教えることで、各地に文化・文明が起きたのでした。

クニトコタチは「日本」の元の「トコヨ」クニを建国しました。それは、「トのヲシテ」の理念を普及して、恵民立国の国家でした。さて、初代のアマカミ（古代の天皇陛下）に就くことになったクニトコタチさんは、地球の８方の各地にキミ（指導者）を送ります。そして、各地の８方面の地域にクニサツチのキミが誕生します。それぞれ、クニサツチのト・ホ・カ・ミ・ヱ・ヒ・タ・メの各ミコカミ（次代の指導者）が治めたクニは何「ガタ」とも呼ばれます。つまり、これが「おのころ」といえるわけです。２回目の「おのころ」です。

（以上が、２回目の「おのころ」）

クニサツチの各８方面のミコカミ達は、それぞれヌシ（キミ）となってその地域を治めます。それぞれの国に、キミの他に、中間指導者のトミを任命します。それで、キミ・トミ・タミの３段階の階層に分化しました。次の代の３代目アマカミはトヨクンヌです。また、その次の時代になって、トヨクンヌまでの１００人に余る指導者たちも、亡くなり、大宇宙の星に準えられて祭られます。トヨクンヌはアナミの８カミ（ヤカミ）として尊敬されます。この後の、世代からは３２カミ（ミソフカミ）に準えられます。それは、大きく農業生産力が増したからです。さて、次の時代の４代目のウビチニ・スビチニは、結婚のノリを始めます。ウビチニは「もも・ひな」の３月３日にウビチニと、結婚の儀式を始めたのでした。これより、男女のペアが定まります。また、長い年月を数える「マサカキ」の暦の計数樹木を、植え替えます。「マサカキ」の樹は、６０年で枝先が少し伸びます。６００年で１０枝を得ます。６００００年で１０００枝を得て寿命が尽きて枯れます。従来から受け継いできていた「マサカキ」の樹は、かなり寿命が短くなっていたため、東北地方のヒタカミに伝来していた「マサカキ」の樹の苗を分与してもらったのでした。すなわち、従来からの伝来の「マサカキ」の植え継ぎ５００本目のあと、ヒタカミから分与してもらった「マサカキ」を植え継ぎました。それから、何代にもの世代が移り変わってゆきます。新しく苗木を替えて植え継いでいった「マサカキ」が２０本目になると、世の中は混乱を呈して来ます、「わいため」無き状況に至りました。その時、７代目アマキミとなったのが、イサナギ・イサナミのフタカミでした。直系の血筋ではなかったイサナギ・イサナミが世を継ぎまして、全国をあまねく巡り教えたのでした。

農業生産量の減少に苦しむ民衆に、食糧増産の方法を教えて回ったのでした。スキ（鋤、スコップ）やクワ（鍬）の使い方、作り方を教えます。また、

（C）　池田　満

畜力を農作業に利用する方法も教えて回ります。角の無い獣（けだもの）は乗るのに適しているので、乗り「むま（旨い）」し、との意味で「むま（馬）」と名付けられました。角の有る獣（けだもの）は乗るのに大きな力を出しますので、乗り「うし（大きく為す）」し、との意味で「うし（牛）」と名付けられました。「うし（牛）」は力が強いので、田圃を起こす粗鋤の作業や、荷物の運搬に役立ちます。農耕の作業に革新をもたらすことで、人々の生活に豊かさを取り戻せました。この故に、世の中は自ずからに治まっていったのです。これが、「**ロ田ロ央**（オノコロ）」のシマ（締まり）と言うのでした。

（以上が、３回目の「おのころ」）　』

さて、青年のミマゴ（み孫・のちのニニキネ）は、厳祖父のアマテルカミのお話を聞いていたのでした。ここで、疑問の事に気が付きまして、聞いてみる事にします。

『２回目と３回目の「**ロ田ロ央**（オノコロ）」のことは、良く解りました。でも、１回目のアメミヲヤの巡る時の音の事が、今ひとつ、解りかねています。と言いますのは、アメミヲヤの巡った時は「**ミロロミ**（ホオ コホ）」と鳴っていたはずでした。それが「**ロ田ロ央**（オノコロ）」と同じとは言い難（にく）いのではないでしょうか？』

アマテルカミは、ミマコ（み孫）のニニキネに答えます。

『そうですね、確かに音だけを聞くと「**ミロロミ**（ホオ コホ）」と、「**ロ田ロ央**（オノコロ）」とは違いますからね。詳しく説明しましょう。

「ほおこほ」とは、混ざって合成された響きです。ひとつずつの音を聞いて見ましょう。そうしますと、クルマは「**ホ ※**（キーン）」と聞こえます。

また、ナルカミ（雷名）は「**ミロ央ミロ央**（ホオロ ホオロ）」と聞こえます。「**ミロ央ミロ央**」の音韻の尾のほうは、母音ですね、これはすべてが「**◎**（わ、地面）」を固める作用の「**ロ**（コ）」である「**ロ**（オ）」の響きになっています。「を」のヲシテでもありますね。固め整える働きです。

無断転載を禁じます。

（以上が、「おのころ」の「お」）

「田（ノ）」の「[illegible]（カセ）」に、この固め整える働きが及んでゆきます。アマミヲヤの乗るムマ（馬）のクツハミ（轡）の音は、「[illegible]（コオ コオ）」と鳴ります。そのムマ（馬）の踏む後の窪みは「田（ノ、野）」に成ります。「田（ノ、野）」はヒト（人類）が生活出来る場所になります。これが「田（ノ、野）」の「[illegible]（テ、ヲシテ）」の働きです。

（以上が、「おのころ」の「の」）

根っこになる「[illegible]（ワ、地面）」が出来上がりますと、その上には「[illegible]（ヨロコ、万物）」が生じます。「[illegible]（ネ、根・根拠）」の「[illegible]（ワ、地面）」の出来る働きは「こ」のヲシテの働きですね。

（以上が、「おのころ」の「こ」）

さらに、人類がヒトとしての社会生活を構築するには、「[illegible]（ト）」のヲシテの働きを使う必要があります。トのヲシテですね。その、「[illegible]（ト）」のヲシテは、自分自身の根拠が自立していることが、成立に前提の条件としてあります。「[illegible]（ト）」を上下逆さまにした「[illegible]（ロ）」がこの事ですね。「[illegible]（ト）」は「[illegible]（チチ、父）」の働きとも似ていて、外界から集めて来る力です。「[illegible]（ロ）」は「[illegible]（タラ、父母）」の「[illegible]（ラ、母）」働きとも似ていて、内に恵む力です。

（以上が、「おのころ」の「ろ」）

「[illegible]（オノコロ）」の４っつの音韻の母音は、「[illegible]（オ）」ですか

（C）　池田　満

ら固まり整える性質を持っています。つまり、クニ（地球・国家・地域）を導き整え治める作用を表します。人々にワサ（仕事・生業）を教えて自立させ、「ト（ト）」と「ホ（ホコ）」に拠って「クニ（クニ、国）」を成り立たせて世の中に安定を齎します。この、ふたつの柱により国家を立てて、人々を平和に豊かにと導くことが出来るのです。

さて、ここまでは天地の開闢と「クニ（クニ、国）」の成り立ちについての「オノコロ（オノコロ）」の事でした。この他の意味でも「おのころ」は有意義に働くことがあります。何か、定まらずに困ったことが起きた時、「オノコ（オノコ）」・「オノコ（オノコ）」と祈りの言葉に使うと良いでしょう。

ワランヘ（わらべ・童）が夢に魘（うな）されていた時には、「オノコ（オノコ）」・「オノコ（オノコ）」と祈りながら手を擦り撫でてやるといいでしょう。それは、「ハタタ（ハタタ、はたって来たり）」の「カミナリ」が襲って来たりしても、「オノコ（オノコ）」・「オノコ（オノコ）」の祈りで「ホオコホ（ホオ　コホ）」の音にも終息が近づく事になります。そして、ワランヘ（わらべ・童）にも人心地が齎されます。この場合の「オノコロ（オノコロ）」は、祈りのノト（祝詞）の整えを願う言葉です。

（以上が、４回目の「おのころ」）

同様に、「オノコ（オノコ）」・「オノコ（オノコ）」の祈りの言葉は、ワラヘ（わらべ・童）の額に粒々の吹き出物が出た病気にも効果があるでしょう。かつて、アメミヲヤがクニタマ（地球）を巡った時、火山の始終噴火していたのを静めていったのが、この言葉の働きでもあるのですから。

「マシナフ（マシナフ）」と言う言葉の意味は、少しでも「マシ（マシ、

無断転載を禁じます。

マコト)」に「⊕（ナ、成る)」ように「⚠（フ、振るってゆく)」と願いお祈りする気持ちの表明なのです』

（C）　池田　満

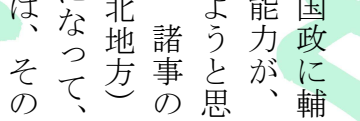
無断転載を禁じます。

１９Ａ　のりのり ひとぬきま のアヤ

７代目のアマカミの時代も、年月の随分と経過した頃の事でした。７代目アマカミは、イサナギさんと、イサナミさんのお二人でして、フタカミとお呼びすることが一般的でした。それは、国内政治の混乱の状態をお二人で力を合わせて、難局を乗り切ってこられたので、尊敬の念を持って特に「フタカミ」と申し上げているのでした。

さて、「フタカミ」の時代も長い年数が経ちまして、平和と安定が世の中にもたらされてまいりました。そして、皇太子のワカヒトさん（後のアマテルカミ）も、学問を修め立派にご成長をなされたのでした。いよいよ、世代の交代になります。

・

ワカヒトさんは、８代アマキミにご即位されようとなさいました。ワカヒトさまとは、アマテルカミの、「まことな（いみな）」です。この時の、補佐をする陣容は、第一のトミ（臣）にオモイカネが就（つ）きました。左の臣です。次のトミの右の臣には、サクラウチが就きました。そして、総合的な後見相談役としてカナサキさんが任じられます。カナサキさんは、「
 （ヒをうつします　ヱヲヤトミ）」と呼ばれます。カタのミコトは農業大臣に位置する「ウケモチ」さんと呼ばれます。ヲハシリは運輸大臣に相当しましょうか「ムマヤヲサメ（馬事所轄）」です。こうして、アマテルカミの最も初めの時期の政り事の輔弼陣容が定まったのでした。

『キミとトミと、こころひとつに　つかさとれ』と、先代のアマカミのイサナギさんがミコトノノリを発せられました。

さて、ヲハシリは、馬事に自信はあったものの、アマテルカミの国政に輔弼するとなると心配になって来ました。はたして、自分自身の持つ能力が、その任に堪え得るのかどうか？　そこで、トヨケカミに教えを受けようと思い立ったのでした。トヨケカミは、アマテルカミの厳祖父であって、諸事のミチに深く通じておいでです。トヨケカミのおわしますヒタカミ（東北地方）のミヤに参上しました。ヲハシリが「ムマヤヲサメ（馬事所轄）」になって、国政に中心的な関与をすることになったことを聞いた、トヨケカミは、そのヲハシリの技量を見て納得なさいました。そして、さらに、馬事の深奥の奥義についての伝授をなさいますのでした。

『ムマ（馬）を乗りこなしてゆくことは、あなたでしたら、相当に熟達し

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

ていますので、初歩から言うこともないでしょう。でも、他人に教えたりする何かの機会に役立つと思いますので、一から述べておきましょう。

乗馬の方法には、「ちみち」「いつのり」「あれのり」があります。

乗馬の基本の乗り方は「ちみち」です。常の乗馬方法です。それは、マコ（馬子）に手綱を引かせておいて、ムマ（馬）に乗ります。ムマ（馬）の右からアフミ（鐙）に足を掛けて踏み登って行きます。ムマ（馬）の背に、乗り心地良くするためにクラ（鞍）を乗せ敷きます。クラからぶら下げるアフミ（鐙・あぶみ）には、マチ（余裕）を持たせるために5キ（5寸）下げ紐を短くしておきます。それで、足に曲がりのクッションが出来ます。5キがちょうど良いかどうか？　人それぞれで微妙な調整をして下さい。それは、足の長さも人それぞれで、微妙に違いますから。人の腿（もも）と、ムマ（馬）のハルヒ（腹帯）との、適切な余裕のバランスを乗馬しながら微調整をするのが良いです。クラ（鞍）に腰をしっかりと据えて、やさしくやわやわとムマ（馬）を誘導して下さい。そうしましたら、ムマ（馬）の呼吸ともぴったり合って来て、乗りこなせます。腰が中心に位置することをイメージするのが、要点です。さらに、ムマ（馬）の気持ちを良く知って、さらにこうしたら良いと「ニ」のココロ（気持ち）を働かせ得るようにする事が更に更に大切です。何故ならば、気を付けて考えておきたいのが、ムマ（馬）は生れ付きに何も知らないことを、ヒトが理解しておくべきからです。ムマ（馬）は、その時の気分でアタ走りをしたりします。そんな時に落馬をしてしまうのですね。人馬の二つの中心は、馬上の人の腰にあることを体感していれば、不意を食らったムマ（馬）の動きでも対応が出来得るのです。

高度な乗馬法は「いつのり」「あれのり」です。ムマ（馬）を走らせ、障害物を跳び越させる乗馬法です。このときには、柔らかな皮をクラ（鞍）の下に敷いて下さい。ムマ（馬）のハルヒ（腹帯）は締め気味にしましょう。また、障害物を飛び越しの時に、クラ（鞍）から下げているヒチ（泥）除けの垂れ皮がウハ（浮かす働きの大きな羽根）となるのは、次の経緯で説明できます。ムマ（馬）を走らせて行った時に、窪んだ小溝があったとしましょう。そのまま走ると、小溝にムマ（馬）が脚を引っ掛けてしまうかもしれません。そこで、馬上のヒトが、アフミ（鐙・あぶみ）で、垂れ皮を打ち付けて煽（あお）ぎ開かせるのです。垂れ皮は、打ち煽（あお）がれるので、開いて風を孕みます。それで、羽根となるわけです。

ムマ（馬）が飛んだとしても、馬上のヒトに余裕の呼吸がないと、上手な飛び方が出来ません。ムマ（馬）の口に銜（くわ）えさせているクツワ（轡・くつわ）の引き綱のコントロールが重要なのですね。引き付け過ぎては、ムマ（馬）は飛びにくいですし、緩め過ぎては飛ぶタイミングをムマ（馬）が掴み難いです。その、良いコントロールの具合を「ひとぬきのま」と名付け

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

ます。

「ひとぬきのま」の意味は、大地の成り立ち、天地の始まりを思い起こしてみると解ります。アメツチ（天地）のまだ完成していない時代のことです。天地の成り初めがおきます。アホ（軽く透き通ったモノ）がアメ（天空）と成ります。また、ウヒ（重く光を通さないモノ）がクニタマ（地球）に成ります。この形成初期の時代のクニタマ（地球）は、まだドロドロの状態であったのです。ときに、アメのミヲヤ（創造神）がクニタマ（地球）の周りを駆け巡ります。アメのミヲヤは、ウツロ（ウツロイ・ウツホの自然神）をムマ（馬）として乗り巡ります。シナト（カセ、風の自然神）を、タツナ（手綱）としてコントロールします。こうすることで、ドロドロの状態のクニタマ（地球）の上を巡る事が出来たのでした。アメのミヲヤが乗り巡ったから、クニタマ（地球）はオノコロに定まり固まって来たのでした。アメのミヲヤの、乗馬法を想い見れば、そのもっとも要のコツが掴めるでしょう。

また、後の時代のフタカミ（７代アマキミ・イサナギ、イサナミ）も、同様な事であったと言えます。食糧生産の減少から来た国内政治の混乱は、さしずめ、ドロドロのクニタマ（地球）になぞらえる事が出来ます。そこに、ムマ（馬）に乗って諸国を乗り巡り、ウシ（牛）の使い方を教えて、人々の生活の改善向上に努めたのでした。まさに、フタカミの諸国巡教は、太古のアメのミヲヤの乗り巡りに似ています。どんな困難な状況に遭遇しても、アメツチ（天地・大宇宙）の生成過程や、フタカミの困難な状況の事に思いを馳せれば、自ずからにより良き答えは出てくるのです。それが、「オノコロ」の言葉の意味合いです。（『ホツマ ツタヱ』１８アヤ参照のこと）

クニタマ（地球）の清らかなる安定。

国家社会の清寧なる安定。

それらは、ウツロ（ウツホ）のムマ（馬）と、クツワ（轡・口はみ）に付けた手綱のコントロールに依（よ）って実現できるのです。

定まって行くべき理想のイメージはどういうものであるか？

そして、中心はどうあるべきか？

そのような縦糸（たて・経）に巡らす理念を、馬上の乗り手が持つことが大事なのですね。それで、正しくゆく道筋を指し示して手綱をコントロールすることを為し得ます。

長期展望を持つこと、また、クニタマ（地球）の中心から来る重力の方向を常に実感していることで、馬上からの墜落の落馬をする事は無くなりますでしょう。クニタマ（地球）との一体感を持ち続けることを「ひとぬき」の「✿（ヲ）」と言うわけです。それは、現在進行形のものも勿論大切ですが、過去からの長い歴史的な理解も重要なのです。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

そうして、「ひとぬき」の「✡（ヲ）」が理解できましたら、ムマ（馬）が突然に走りだした時にも、落馬しないようになります。それは、天地の創造神としてのアメのミヲヤの意思があって、美しい天地が創造されたわけです。ウツロイのムマ（馬）が暴走しないように、シナト（風の自然神）のタツナ（手綱）でコントロールしたからです。人が乗馬する際にも、ムマ（馬）のこころを乱さぬようにタツナ（手綱）でコントロールするのですね。これが「ひとつらぬきのヲ」（ヲは繋がりの働きを意味する）と言う謂（いわ）れです。タツナとは、春の生き行くさまの、そのままに、成り行く、と言う意味合いにも理解が出来る言葉です。

それで、馬上の主の意思のそのままに、ムマ（馬）が動いてくれるのです。

特に高度な乗馬法の「あれのり」では、緩急の程相を知る必要があります。アフミ（鐙・あぶみ）でもって、クラ（鞍）から下がった垂れ皮を打ち煽（あお）ぐとしましても、口食みに付けた引き綱のタツナ（手綱）を引き絞ったままでしたら、ムマ（馬）は飛ぶ事が出来ずに前足を蹴躓（けつま）づくようにして倒れてしまいます。アフミ（鐙・あぶみ）で飛ぶ事を強く意思表示したら、タツナ（手綱）はずっと緩くして前方への方向への自由度を増さねばなりません。締めるところがあれば、自由度を増やすための緩める場所を作るのが重要です。「ほとらい」の「ま」と言うと解りやすいでしょう。ヲシテで考えるとさらに良く解ります。こうしてこそ、溝や障害物をムマ（馬）が飛び越す時でも、落馬することもなくなります。

「ほとらい」の「ま」まで解れば、「ちみち」も「いつのり」も「あれのり」の高度な乗馬法でも十分にこなす事が出来るでしょう』

この、トヨケカミの教えを受けて、さらに実地の練習をして行こうと思ったのでした。ヲハシリは、毎日毎日１００回以上も乗馬の練習に打ち込みます。１０００回、１００００回と、回数を積み重ねますと技も練り慣れてきます。この頃、「ちみち」の「つずのわさ（技）」が体得することが出来るのでした。そののちに、年を重ねてさらに練習を積み重ねてゆきますと、「あれのり」の３２の「はなわさ（技）」も出来るようになりました。またさらに、年々を重ねて乗馬の練習に励みますと、「いつのり」の５９の「さつめ」の妙技（たえわざ）も他人に教えてゆけるほどに上達しました。

さて、そうしましたら、アマテルカミからお褒めを賜ることになりました。そのミコトノリには、

「田ん　✡ん　き　中（のり　ヲシエ　ト、乗馬法の教授・プロフェッサー）」に任じる旨を言われたのでした。乗馬法のプロフェッサー（教授）ですね、そこには、多くのヨリコ（学生）が教えを請いに来ます。ヲハシリの教

（C）　池田　満

えた人のうちには、ソサノヲさんも居ましたし、イフキトヌシもヨリコ（学生）であったのでした。ヲハシリの教えたヨリコ（学生）は、相伝のまた伝授も含めると８５３０１８人にも達したと言われています。

そのヲハシリの乗馬法の流布のお陰があっての事だと、いうのが、ハタレの騒乱をうまく平定できた理由にも挙げられています。

豊かさと平和な時代が長く続いた反動でもあったのでしょうか、ことわざ（諺）にも「満つれば、欠ける」とも言います。ハタレの騒擾の社会反乱に加わった人々は７０９０００人にも上ったと言われています。そのような大混乱にも、立ち向かって行くのには「田丸 田丸（ノリ・ノリ、乗馬・法）」の完成と流布がモノをいったのでした。ハタレ達の平定を宣言するミコトノリの「ヲシテ」が発せられました時、朝廷に集う諸司（カミ）達は知恵を出して力を出して、ハタレの平定を成し遂げたのでした。

それは、ヲハシリが教えた「あれのり」や「いつのり」の乗り弓（馬上からの矢射）の技術が役立ったのでした。ヲハシリが教えて、タケのモノノヘ達（武道に長けた司たち）となった人達が活躍しました。

タテ（縦・恵みを齎すこと）の働きを妨害するものが、「よこしま」です。いくら言い聞かせても、逆らって妨害行為を繰り返すならば、平定せざるを得ないのでした。ヲハシリの「乗り弓」の軍事技術で、「よこしま」モノ達を平定し得て国内に平和が訪れました。国民の生活にも安心感が出てきました。安寧な秩序の回復です、例えれば、４８音韻の縦横が通ったようなものとも言えましょう。

ヲハシリの「乗り弓」の軍事技術を受けて力を発揮したモノノヘ達を、アマテルカミはお褒めになりました。

特に、ヲハシリは「キツ・ヲハシリ」と最上の誉め名を賜りました。箱根は、ヲハシリのサカと呼ばれます。あるいは、また、伊豆の走り湯の所もヲハシリのサカと呼ばれたのかも知れません。

さて、ヲハシリの出自は、実は、トヨケカミのお孫さんだったのでした。トヨケカミのお孫さんのミカサヒコさんが、乗馬が得意なので、ヲハシリと呼ばれたのでした。

また、その子供さんのヒサヒコさんは、カシマカミと後に呼ばれます。また、イカツチ（雷）を拉（ひし）いだほどの功績に拠ってタケミカツチとも称（たた）えられて呼ばれます。

無断転載を禁じます。

１９Ｂ　のりのふみ　てるたえ のアヤ

８代のアマキミ（古代の天皇陛下）のアマテルカミから、次の時代へ移る時のことでした。アマテルカミの次の時代を担う、皇太子はオシホミミさんです。オシホミミさんは、９代目のアマキミにご即位なさいます。時に、２５ススヽ１３０ヱタのマサカキのコヨミ（暦）のサナト（５８年）の年の事でした。１月１日からアマテルカミはご退位の事を事前に広く宣言なさっておられました。すでに、ミクサタカラ（三種の神器）の授与も行われて、この、準備は整えられていました。

アマテルカミは、譲位の後の引退の余暇を、人々を導き教えようと熱い志に燃えておられるのでした。時に、イセ（伊勢）のミヤ（内宮）にお遷りになられまして、常に教導に日々を奉げてゆかれるお考えでした。

丁度その頃に合わせたのでしょう。

ツキスミ（九州・西の月の住処）に住んでいるオオクマト（アメクマ）が、ムマ（馬）を献上しに来ました。オオクマトは、カタのミコトの農業技術を教えて貰いに行った経緯もありました。オオクマトは、ヒツメ・アオコマ【詳細は未詳】のムマ（馬）を引き歩んで来ました。アマテルカミは、とても、興味深くご覧になられていました。それで何かをお考えになられたのでしょう。オオクマトに賜う御馳走には、薬草のお粥が供される事になりました。

ヌヱアシモチ【悪さをする鳥か？　詳細は未詳】から及ぼされるガサクサ【禍いや、病気。詳細は未詳】も防止予防することが出来るので、この薬草のお粥を食べて下さい。との、ご配慮だったのでした。アマテルカミのご指示で作られたお粥は、７草粥でした。「こけう（御形・ごぎょう）」「はこへな」「いたひらこ（仏の座）」「すすな（蕪菜・かぶら）」「すすしろ（大根・おおね）」「すせり（芹・せり）」「なつ（ナズナ）」の７種の菜のお粥でした。

それから、ひと月ほどたって、「さくら」の「は（葉）」も出揃ってきた頃の、モチ（満月の頃）の日に、コカネ・ヒツメ【詳細は未詳】のクロコマを献上して来た人がいました。それは、アマテルカミのいとこに当たるタカギさんでした。タカギさんは、タカミムスヒの７代目の当主でもあり、次代のアマキミに即位した、９代アマキミのオシホミミさんのおキサキさんであるチチヒメさんの父親でもありました。

これらの献上馬を、アマテルカミのおキサキさん達の３人がマナヰまで乗って行かれました。そして、マナヰでのお祭りを、しばしばなさいました。マナヰには、トヨケカミのご陵所がありました。アマテルカミの御祖父でもあり、ミチの師匠でもありました。また、タカギさんの御祖父でもありました。今は亡きトヨケカミに、９代アマカミのオシホミミさんのご即位の報告

（C）　池田　満

が果たせたのでした。これによりまして、天下安寧の一助ともなったわけでした。女性にも、乗馬の技術が浸透したことは、トヨケカミもお喜びになられるはずです。

さてこの後に、年数が過ぎ、オシホミミさんのミコ（皇子）のニニキネさんが、関東地方（ホツマ）への開拓赴任に向かいます。ホツマ（関東地方）のニハリ（現在の茨城県筑西市古郡）に新ミヤ（宮）を建てるのです。この時に、乗馬法の教授をタカヒコネが受け持ちました。ヲハシリさんを師匠として、研鑽を積んだのがタカヒコネさんでした。タカヒコネは、ニニキネさんに「のりのり（乗馬法）」をレッスンしました。

入門編の基礎は「ちみち」です。この後に控えるのが、高度な乗馬法の「あれのり」「いつのり」です。この高度な技の習得には１００回も１０００回ものレッスンを受けて、さらに、自主的な練習を積んで初めて可能になります。

さてその前に、ムマ（馬）に乗るには、その、ムマ（馬）のことを良く知る必要があります。ムマ（馬）は、産地によって性質や性格に違いがあります。

ヒタカミ（東北地方）産のムマ（馬）は筋肉隆々としています。それでいて、性質は穏やかで素直です。それで、ほぼ1年間訓練すると「ちみち」の技は大体乗れるようになります。その後に、「あれのり」の高度な技に進めていって下さい。

ツクシ（九州）のムマ（馬）はすこやかです。元気さが勝っていると言いましょうか、それでなのでしょうか、馴れるにも時間が長くかかります。１年半ぐらいで「ちみち」の技が出来るようになります。馳せたり、馬上からの騎射をしたりの「あれのり」「いつかけ」には、あまり向いていないのが、ツクシ（九州）産のムマ（馬）です。

コシ（越前・越中・越後）のクニ産のムマ（馬）は大柄（おおがら）で、筋肉も中肉のことから、人との慣れ親しみに向くようです。コシクニ産のムマ（馬）は、３～４か月の訓練をしたら、だいたい「ちみち」の技は出来るようになります。そして、高度な技の「いつのり」までもを一気に習得していく事が出来るのは、不思議なほどです。

南のクニ（南海道諸国）産のムマ（馬）は、背丈も小さいです。１年ぐらいで比較的早くに「ちみち」の技を習得してゆきます。しかし、「ね」が薄いようです。それで、立派な功績を立てるほどのムマ（馬）にはならないようです。

産地別に分類すると、おおよそにはこういった特徴があるようです。しかし、それとはまた同等に個別の特徴がムマ（馬）それぞれに備わっています。強いムマ（馬）、弱いムマ（馬）の違いは、タネ（血統）に因（よ）るところが大きいです。また、毛色の種類に別けての善し悪しの区別もあります。そ

れらの、区別についても生れ付きの特徴は言えます。しかしさらに、育ち方・育て方の違いでムマ（馬）に備わる　「シナ」も大きく変化が起きる事を忘れる訳にはまいりません。

そのムマ（馬）に乗り慣れることで、その特徴を知って初めて上手く乗りこなす事が出来ます。

ムマ（馬）を用いることが必要になるのは、稲に付く害虫の発生が起きた緊急の時や、ヒ・ミツ（火の災害・水野災害）のワサハヒ（生業が成り立たなくなる）による緊急時などがあります。また、ノリ（法律・掟）を犯して他人に災害を及ぼす人が出た時にも、ムマ（馬）の乗馬術が必要になります。その際には「てるたゑ」の乗馬法を用いて下さい。

「てるたゑ」の乗馬法は、手を自由に使えるようにしてムマ（馬）に乗る方法です。それは、手にツルギ（剣）を持つための方法です。クツワ（轡）に付けるタツナ（手綱）には、キヌの布を用いずに、チチミヌノ（縮み布）を用います。これを、「あかるたえ」と言います。縮めるユフの布のヤタ（８タ、８尺）をふた流れ、クツワ（轡）の左右のミツツキ（手綱を付ける穴）に結んで、輪の状態にします。そして「あかるたえ」の両端の手に持つべきところの「てつき」を腰の帯に挿（はさ）み込みます。腰の左右からの「あかるたえ」の２筋の縮み布が、腰を捻（ひね）る事によって、伸び縮みします。その伸び縮みが、クツワ（轡）を通じてムマ（馬）に伝わります。腰を左に捻（ひね）ると、ムマ（馬）に左に行けと指令を出す事になります。腰を右に捻ると、ムマ（馬）に右に行けと指令を出す事になります。腰でのムマ（馬）のコントロール法はまさに「たえなるわさ（高度技術）」と言えましょう。これが可能となるのは、アメツチの運行の法則に似たところがあります。ヒ（太陽）や、ツキ（月）が、クニタマ（地球）との間に目には見えないナカクシのつながりを持って巡っているのと同様です。あるいは近く、あるいは遠く、に巡る事から季節の移り変わりが生じます。ハル（春）とアキ（秋）との季節を中心として、ナツ（夏）には近くを巡り、フユ（冬）には遠くを巡ります。このようにアメミヲヤは、「あかるたえ」の見えない糸を腰の捻（ひね）りによって操縦しているような構造と似ているわけです。

この「あかるたえ」の技術を習得してゆく方法を述べましょう。

「あかるたえ」の際の乗馬には、先ずは、ムマ（馬）の足どりを見定めておくことが肝要です。クラ（鞍）だけを敷き乗せて歩かせてみましょう。前に前進させてみて、後ろに後退をさせてみて、その動き方を見定めるのですね。だいたい６０歩ぐらいのムマ（馬）の足どりを見れば、その動き方のおおよそが解ります。これを十分に知った上で、乗馬しましょう。一般的な普通の乗馬法の「ちみち」ではカナ・アフミ（金属の鐙）が使われます。でも、駆ける時には、重みや重心バランスの良いものが適して来ます。アフミ（鐙）

無断転載を禁じます。

をぶら下げている釣り縄は、重力によってまっすぐに下がります。これが、駆けた時の動きのうちにうまくバランスを取れるような、そのようなアフミ（鐙）を選定することが必要です。アフミ（鐙）をぶら下げている釣り縄は、「ちみち」の時より5キ（5寸）短くする程度に調整すると良いでしょう。また、ハルヒ（腹帯）も、「ちみち」の時には緩めで5本の指が通るぐらいの余裕があると良いです。しかし、「いつかけ」などの高度な馬術をする時には、ハルヒ（腹帯）も少しきつい位に締めるようにしなくてはいけません。また、シトナメキツナ【詳細は未詳、おもがいか？　しりがいか？】やムナガイ（馬の胸に添えるモノ）も、シホテ（鞍の前輪・後輪に括り付けるために設けた穴）に添えます。そして、クツハ（轡）に付けるツナ（綱）のタツナ（手綱）は、1タケ6タ（1丈6尺）のモノを使います。タツナ（手綱）の中間あたりをキツナ【詳細は未詳、シホテに付けているものか？】に添えます。タツナ（手綱）の片一方は、クツハ（轡）に付けます。これで、左右の両方に運動が伝わります。また、タツナ（手綱）のもう片方は、手に握るのです。この仕掛けによって、ムマ（馬）が操縦不能に陥ることを防ぐことが出来るのです。これは「ひとぬきま」とも呼ばれます。

さて、「てるたえ」の更なる高度な乗馬法に言い及びましょう。「てるたえ」でのタツナ（手綱）は、1タケ6タ（1丈6尺）のモノで同じと言えますが、「あかるたえ（アカタヱ）」の縮み布を用いますからいつも同じ寸法とは言えません。クツハ（轡）の左右のミツツキ（タツナを結びつける穴）にタツナ（手綱）を付けて、ヒトの両腕でムマ（馬）をコントロールするようにします。さらに、このタツナ（手綱）の中ほどあたりを持つのですね。縮み布の「アカタヱ（あかるたえ）」ですから、「てるたえ」の技を為すにも、ヌキマ（抜ける間）を措（お）く事なく出来ます。

どのムマ（馬）が高度な技に適か不適かの品定めについて、説明しましょう。

先ずはムマ（馬）の眼鼻の先から、オホネ（尾骨）に至るまでの長さが基本になります。それは8タ（8尺）の長さがおおよそのモノです。そのうちツツタチ【詳細は未詳、繋がり立つ位置か？】は、5タ5キ（5尺5寸）のところが最も適しているのです。さて、尾骨までが8タなら、尻尾の先までは8タ5キでしょうか？　これを、8月モチ（15日）としましたら、5タ5キは、5月5日に相当しますね。5月5日のノリ（乗馬）の祭典はとても神妙なものです。たとえ、大きな太い立派な体格のムマ（馬）であったとしても、8対5．5の割合を考えて対応をすれば良いのです。

このように、タカヒコネ（アチスキタカヒコネ）から、教えを得たのがニニキネさんでした。アマテルカミのミマコ（お孫さん）のニニキネさんは、馬術の修練を積んでいきます。

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

乗馬の練習の初めは「ちみち」の通常の乗馬法を習得します。そのあと、慣れるに従って「あれのり」を何か月もかけて練習します。さらに、その次には「いつのり」です。高度な馬術の「いつのり」の習得には何年にも渡っての練習が必要です。こうして、ニニキネさんは何年もの練習の結果「いつのり」も出来るようになりました。

両手を自由に使いながら、馬の走り方にも自由に操縦をできるのが「いつのり」です。実際にニニキネさんが「いつのり」を出来るようになって、この技術の精緻さに感動したのでした。「いつのり」の技術を完成させたヲハシリさんには、「ヰツ」の称号を、ヲシテに染めて賜う事になさいました。これにより、ヲハシリさんは「ヰツ・ヲハシリ」と尊んで呼ばれる事になります。

また、ヲハシリさんの弟子で、ニニキネさんの指導をしたタカヒコネさんには、「フタアレ」の称号をヲシテに染めて下賜なさいました。タカヒコネの子も、さらに孫も、「ムマノキミ」と尊称されます。

ムマ（馬）の薬には、ヒトミコマヒサ　ウハナ　クス　ツチヒトヱハ　マメハコソ【未詳】。

ヰツヲハシリと、タカヒコネには、「フタアレカミ」の尊称が付けられました。

キサラシヱ【キサラキ（2月）のシ・ヱの日のことか？　詳細は未詳】に祭ることになりました。また、ノリユミを習うその頃の事です。後世での賭弓（のりゆみ）の旧暦正月１８日の恒例の行事と、関連ありやナシや？　賭弓（のりゆみ）は、紫宸殿の西側にて弓の競技をします。勝ち組には、賭（の）りもの（布）を賜ります。負け組には、罰の酒を頂くことになっていました。また、馬上から弓を射る流鏑馬（やぶさめ）の騎射（きしゃ）の宮中での行事は、旧暦の5月5日におこなわれていました。今では、流鏑馬もおこなう、上賀茂神社の競（くら）べ馬神事がつとに有名です。

（C）　池田　満

２０、すめみまこ とくさ るゐる アヤ

マサカキのコヨミ（暦）の２６ススに至った時の事でした。詳しくは、２６ススイ６ヱ（ヱタ・枝）４１ホ（トシ・年）のキシヱの年でした。

ナカクニ（現在の近畿地方にほぼ匹敵）を治めていたクニカミのココトムスヒ（カスガトノ）からの上申がありました。時のアマカミ（古代の天皇陛下）は、９代、オシホミミさんでして、東北地方にミヤコ（首都）を開いておられました。

さて、ココトムスヒは、何を言わんとしたのでしょうか？　ハタレの騒乱を根底に於いて治め得た功績によって、ナカクニ（現在の近畿地方におおよそ該当）のクニカミ（のちの国司）に任じられていました、のが、ココトムスヒでした。

ココトムスヒの口上は、次のような内容でした。

『ハル（春）のやよい（旧暦の３月、現在の４月初旬から中旬に該当）になって、いよいよ、老齢の事が身に沁みるようになりました。このため、政治の事からは引退したいと思います。どうぞ、よろしくお願い申し上げます』

と言うことでした。　大混乱のハタレの騒乱の終息を果たしたココトムスヒには、アマノコヤネという立派な後継ぎがいましたが、ナカクニ（現在の近畿地方）のクニカミに任じられた経緯を考えますれば、朝廷の判断に委ねることこそが正当な道筋であると、ココトムスヒは考えたのでした。かく成せる社会的な規範は、当時に当然のこととして常識であったということが出来ます。

さて、老齢による引退のあとをどうするか？

ナカクニは、ココトムスヒがクニカミ（のちの国司）になる以前は、スミヨシ（カナサキ）さんが治めていました。ハタレの騒乱の収まった後で、スミヨシ（カナサキ）には、九州の地を、アマテルカミのご名代としての統治を任せたのでした。それで、スミヨシ（カナサキ）の抜けたあとの、ナカクニをココトムスヒが治めることになったのでした。この際に、スミヨシ（カナサキ）の持っていたカスガのモリ（春日大社の周辺地域）を、ココトムスヒに委譲した経緯もありました。ココトムスヒは、尊称でカスガトノとも呼ばれるのはこの由来によります。（『ホツマツタヱ』８アヤ９６）

さて、ココトムスヒの引退をどうするか？

時のアマカミ（古代の天皇陛下）のオシホミミさんは、ミヤコ（首都）遷しをしてナカクニへ赴こうとなさいました。それは、順当なご判断であったのでした。オシホミミさんは、９代アマカミを継がれる少し前に、東北地方に大地震と大津波が襲ったようでして、東北のヒタカミに復興の強い志をお持ちになられました。（『ホツマツタヱ』１１アヤ、『春日山紀』１巻２１（カナ

メイシの記事あり、イシツツ・ツルギのこと)、『ホツマツタヱ』１６アヤ８１（タケミカツチが、イシツツをコモリに譲る）　オシホミミさんは、ミヤコ（首都）をヒタカミの故地に再建なさいました。そして、復興の事が緊急にお忙しいのでした。ミヤコが建てられての翌年に、オシホミミさまは、９代アマカミにご即位なさいます。（２６ス１００ヱ１１年）復興の事情があるために、８代アマカミのアマテルカミは、アマカミの位の委譲に際して、ミクサタカラの授与に、アマノコヤネを授与使に立てて持って行かせられたのでした。

さて、年月がたって、今度は、ココトムスヒ（カスガトノ）の老齢による引退の上申が、ありました。やはり、ナカクニは、何といっても「日本」全体の中心です。ココトムスヒの引退での政治空白を埋めるには、９代アマカミのオシホミミさんのご遷御が望まれるところです。

ご遷都の用意を整えようとなさってましたら、噂を聞いた東北の人々は群れ集まってきました。オシホミミさんが去って行かれては、とっても困る、身を引きちぎられる思いである。と言って、悲しむのでした。オシホミミさんの、あの、おやさしい愛情あふれるご治世は、今現在のわたくしにも、お慕いするばかりです。

群れ集まる人々の、願いを思うオシホミミさんは、遷都を思いとどまる決断をしました。

その代わりとして、ミコ（皇子）のホノアカリ（テルヒコ）さんを、ナカクニのカミとして委任することになさいました。クシタマ・ホノアカリさんとも言います。この決断を、イセのアマテルカミにフミを以って言上しました。その使いはカクヤマでした。

「わたくしが、ナカクニを治めようと致しました。しかしながら、準備を整えるさなかにタミが群れ集まってきて、何とか去らないで欲しい、と、懇願が続きますのでした。そこで、方針を変更したいと考えます。ミコ（皇子）のテルヒコ（ホノアカリ、のちのアスカヲキミ）に、ナカクニのカミとして統治をさせることにしたいのです。いかがでしょうか?」

このフミの内容に対して、アマテルカミも、そういう事情なれば、そのようにして良い、と、お認めになられたのでした。

さて、アマテルカミは、それならばと、トクサタカラ（十種の神宝）を、テルヒコにお授けになります。

1、オキツ・カガミ
2、ヘツ・カガミ
3、ムラクモ・ツルギ
4、ウナル・タマ
5、タマカエシ・タマ

６、チタル・タマ
７、ミチアカシ・タマ
８、オロチ・ヒレ
９、ハハチ シム・ヒレ
１０、コノハ・ヒレ
そして、アマテルカミはお言葉をお添えになりました。
『いたむこと、あらば、
ヒフミヨヰミナヤコト、まで数えて振るえ、ただひたすらに振るえ、
ゆらゆら振るえ、
かく為せば、すでにまかる（亡くなった人）も蘇える』
と、おっしゃるのでした。孫の門出を思い、足らざるところを少しでも補ったやりたいとする、お気持ちだったと理解できます。ヤタのカガミは「タ」の「テ」に振れ（ホ１１-１８）とありますことも、参考になります。
さて、オシホミミさんの遷都なれば安心ですが、どんなお人であるのか判らないテルヒコさんだったら、ナカクニで、反対者も出てくるかも知れません。
そこで、諸のツカサ（司）を配備してのナカクニ入りが準備されました。ハタレの騒乱の収まったとは言っても、再びに混乱の起きないとも限りません。３２人の主だったツカサは以下のようです。
１、勅使にも立ったカクヤマは、ヤマスミ（オオヤマスミ）の２男です。
２、フトタマは、ミムスヒ（７代タカミムスヒ・タカギ）の３男です。
３、コヤネ（アマノコヤネ）とは、カスガトノ（ココトムスヒ）の子。
４、クシタマは、ミムスヒ（７代タカミムスヒ・タカギ）の４男です。
５、ミチネ（アメミチネ）は、カンミ（６代タカミムスヒ）のひ孫です。
６、カンタマは、ヤマスミ（オオヤマスミ）の３男です。
７、サワラノは、アカツチ（九州）の孫。
８、ヌカドは、カガミツコの子。
９、アケタマは、タマツコの子。
１０、ムラクモは、ミチネの弟。
１１、ウスメヒコは、ミケモチの孫。
１２、カンタチは、コモリのハツコ。
１３、アメミカケは、タタキネの弟子。
１４、ミヤツヒコは、カナサキの３男。
１５、ヨテヒコは、コモリの４男。
１６、アメトマミは、ヌカタタの弟子。
１７、アマセオは、カンミのヤサコ。
１８、タマクシは、セオのイトコ。

無断転載を禁じます。

１９、ユツヒコは、サワラノの弟。
２０、カンタマは、タマクシの弟。
２１、ミツギヒコは、カンタマの弟。
２２、アヒミタマは、タカギの４男。
２３、チハヤヒは、ヨテヒコの弟の５男。
２４、ヤサカヒコは、コモロの８男。
２５、イサフタマは、ツノコリの子。
２６、ヰキシニホは、オモイカネの子。
２７、イクタマは、タカギの５男。
２８、サノヒコネは、ヒコナ（スクナヒコナ）の子。
２９、コトユヒコは、ハラキネの弟子。
３０、ウワハルは、ヤツココロ（オモイカネ）の子。
３１、シタハルは、ウワハルの弟。
３２、アヨミタマは、タカギの７男。

主の守りツカサは、この３２人です。乗りムマ（騎乗）での守護についてのナカクニ赴任です。

ミコ（皇子）のクシタマ・ホノアカリ（テルヒコ）さんは、ヤフサのイテクルマ（やふさ・八総に壮麗な飾り付けをした御輿）にお乗りになっての、東北地方からの旅立ちでした。

２５人のハト（イエハト・属人）が、イテクルマ（神輿）の移動を主幹します。それを守るのが５人のミヤツコです。

１、アマツマラは、カンミのヤサコです。
２、アカマロは、ツクハソソの子。
３、アカウラは、シホモリの２男。
４、マウラは、ヤマスミの５男。
５、アカホシは、カツテの弟。

またさらに、オオモノヌシの２代目のクシヒコ（前職名には、コトシロヌシ）は、テルヒコ一行の全体の守護に立ちます。５人づつで５組の、合わせて２５人のモノヘ（軍人）を従えて、守ります。

この、ホノアカリさんのナカクニへの赴任のための一行は、すべて合わせると８６４人になりました。

ヒタカミを出発して、カシマミヤ（鹿島神宮）に到着します。カシマはタケミカツチの居遇地です。その、カシマに至る道道では、人々が大歓迎の祝宴を開きます。でも、季節は農作業の繁忙期に当たっていました。そこで、アマテルカミは、ご心配になられました。農作業に遅れが出るのではないか？ここに、アマテルカミは、海路をイワフネに乗って行くことを勧めることに

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

なさいます。イワフネは、壮麗に飾った大型の船です。

そして、急ぎの使者を立てて、伝えます。急ぎの使者のキヨヒト（のちのニニキネ）と、タチカラヲ（オモイカネの子）は、ハヤフネ（帆を備えた小型の船）のワニフネに乗って、兄のホノアカリさんの道中に向かいます。カンフサ（上総）のツクモ（千葉県長生郡一宮町東浪見）に至りまして、聞きますと、ホノアカリさん達は、カトリ（千葉県香取市、香取神宮のところか？）に滞在しておられるとのことです。早速、カトリに向かいました。ホノアカリさんは、弟のキヨヒト（のちのニニキネ）さんから、イワフネでのお遷（うつ）りのことをアマテルカミからの伝言で伝えます。ホノアカリさんは、マウラに「フトマニ」をウラナウ（占わせ）ようにさせます。すると、「アキニ」の項目が出ました。そこで、解釈に入りますと、

「あきにとる（は）　こちにひもとけ　つみのかる（のがる）　（つくみ　こころの　はるそきにける）」（括弧内は、現存の『フトマニ』）に至ります。そこで、ホノアカリさんは、『今は、ハル（春）であるから、ヒガシ（東）に相当しています。それで、西の空の方は、タミは疲れもない事でしょう。イワフネでの旅ゆきは良い事でしょう』と、判断が定まったのでした。

ハヤフネに乗って来た、キヨヒト（のちのニニキネ）と、タチカラヲ（オモイカネの子）は役目を無事に果たせました。そこで、なお、ヒタカミにまで北上します。ヒタカミには、キヨヒト（のちのニニキネ）さんの父上のオシホミミさんがおわしますのでした。そして、事の次第を報告申し上げるのでした。その後に、イサワ（三重県志摩郡磯部町）に戻ってアマテルカミに報告を申し上げました。

さて、イワフネでの旅ゆきに改めたホノアカリさんは、イワクスのフネ（祝い飾りで飾った船）を設（しつら）えます。そして、アマツマラの叔父（伯父？）のアマツハハラをフナオサ（船長）にしました。アマツマラは舵取り役です。アカウラは、フナコのツカサ（司）にしました。アカマロと、アカホシモノをソエ（添え・副）のカコ（水主）にしました。そして、重要な風見の役はマウラが担当します。

ツクモ（千葉県長生郡一宮町東浪見、近くの玉前神社からのご神行のお祭りが盛大にあります）の船着き場から出発したホノアカリさん達の一行は、櫂（かい）での人力で伊豆の岬まで行きます。（下田のあたりか？）そして、マウラによって良い風が出たことが確認されて、いよいよ、帆を上げて快走するのでした。それはあたかも、大空を駆け巡るような、光景でした。伊豆の山上から眺める海は陽光の輝きが煌（きら）めいて、海と空との境の見分けがつきにくい場合が多いのです。そうして、ミクマノのミヤヰ（熊野本宮大社か？　あるいは、新宮か？　那智か？　熊野市内の産田神社か花の窟神社か？）を参拝したのちに、ナミハ（ナミハヤ・浪速・大阪）からはカモフ

（C）　池田　満

ネ（櫂の動力で前進力の強い船）に乗り換えます、そしてヤマト川（江戸時代に付け替えする前の、旧河川筋）を遡上してイカルカ（奈良県生駒郡斑鳩町）に至ります。ここから、さらに、小さな川の現代では富雄川を溯り、山間のシラニワヤマに当座の依拠を定めました。つまり、イセのアマテルカミの所へは、素通りした事になりましょう。（折角の、陸の旅が出来なかったことから、直接にナカクニへ向かわれたのかも知れません）

シラニワヤマは、現代には住宅地になってます。白庭山住宅地です。大和盆地にも、大阪平野にも出で入る要衝としての選定だったのでしょうか。あるいは、もっと古い由緒に拠っての意味がシラニワヤマにあったのかも知れません。さて、ここにて、協力者のソフ（添上・添下）のカミ（のちの郡司）のスガタさんがおられます。スガタは、今に菅田神社（奈良県大和郡山市八条町一夜松）として残っています。この、スガタさんの娘さんのスガタヒメを、ホノアカリさんは、ミキサキ（正皇后）に迎えます。ウタを詠んで、カタカキとコトを演奏して婚儀の祝宴が持たれました。そして、このあとに、イカルガに本格的なミヤ（政庁）の建設が始まりました。イカルガは、船便の主流だった当時に於いて、要衝の地です。この思いがあって、正皇后に入ったスガタヒメの父君のスガタさんは、立派なミヤを建築したのでした。後には、子孫のモノノベ（物部氏）を経て、ずーっと時代が下ると聖徳太子の法隆寺に建て替えられてゆきます。

さてさて、建築の完成したイカルガのミヤに、ホノアカリさんはミヤのお披露目の祝宴を開きます。その折の事でした。翌日の朝に北方のシラニワヤマを見てみますと。高殿のミヤの展望台に位置しますホノアカリさんの目に、カラス（烏）が飛んでいるのを目撃しました。カラス（烏）は、クマノ（熊野）のイサナミさんの故事のアスカ（阿須賀神社・新宮市熊野地）に由緒の深いことでした。吉兆のアスカ（阿須賀神社・新宮市熊野地）だ！　と、カラスの飛ぶのを見て、ホノアカリさんは思われたのでした。そこで、ミヤ遷しを、宣言しました。その、次期のミヤの造営地は、奈良盆地の南東の隅に位置するアスカ（飛鳥）でした。

ですが、このミヤ遷し（遷都）のミコトノリは、いかにも猪突とも言うべきの、突然なお話です。昨日に、ミヤコ（首都）の定めの祝賀行事が挙行されたわけです。大きなおミヤの建築が為されたのです。それが、翌日に、カラス（烏）が飛ぶのを見たので、吉兆だからと、奈良盆地の南東の位置にミヤコ（首都）を移そうと言うことだったのでした。猪突と言う意味が、お解り頂けるかと思います。

さて、この話しを受けてどうしたか？

ここが、大きな分かれ目になります。

無断転載を禁じます。

そももそ、縄文日本の立憲君主の政体では、「中（ト）のヲシヱ（テ）」の精神に依拠しての政治が規定されていたのでした。「中（ト）のヲシヱ」これは謂わば憲法とも言えます。「中（ト）のヲシヱ」とは恵民立国の精神とも表現できます。ミヤコ（首都）の政庁の完成祝いの翌日の遷都の宣言は、この「中（ト）のヲシヱ」に則って、と言えますでしょうか？

ミヤコ（首都）の、定めの翌日に遷都を宣言するなんて？

ここに、反対して、イサメ（心を覚めさせる、諫言）を申し上げた人がいました。アマノコヤネでした。

『ハヤカレ（早くも枯れる）』ではないか？　と。

また、もう一人強硬に言上するトミ（臣）が居ました。オオモノヌシの２代目に任じられたクシヒコです。（前職名はコトシロヌシ）　クシヒコも、

『それは、まったくもって良くありません』と、とどめます。

しかし、ホノアカリさんの第一の重臣のフトタマは、遷都に賛成で主張します。

『じっくりとお考えになられた、キミ（オシホミミさん）のお決めになられたことを、どうして止めようか』

また、もう一人の重臣のカクヤマも言います。

『クマノのアスカのカラスの故事に基づいたもので、とっても目出度いものである。　この、目出度き遷都のことは、もう決定された事項である』

クシヒコは、かつて、父親のオホナムチに諫言を呈した経験もありました。オホナムチの慢心をイサメ（心を醒めさせる・諫める）なくてはならない。あの時の気持も、切羽詰ったものでした。ですが、訊き入れられずじまいでした。今回はどうでしょうか？　クシヒコは、この国家の重大事に言わねばならないと覚悟して主張しました。

『フトタマさんは、キミのト（チ?）のオヂ（伯父?・叔父?）であって、さらにトミ（臣）達の最年長のヲキナで指導者です。総合的な判断をするべき立場であるはずです。

昨日には、ミヤコ（首都）定めのヨロトシ（万歳）を祝いました。

それが、　今日には、ミヤコ（首都）遷都の決定です。

昨日のヨロトシ（万歳）の祝いは何だったのですか？　１００００年よりも、１０００年よりも、たった1年も経ってもいないではありませんか?』

そう言って、遷都の決定を変更させようとしますが、フトタマもカクヤマも、一向に聞く耳を持ちませんでした。そこで、クシヒコは、職を辞する事

（C）　池田　満

無断転載を禁じます。

を決心します。

『世の中のハヂとは、あなた、フトタマさんのこころにあると思います。キミの思い違いを正すのが、トミの役目です。キミの威を借りて、自らの利得ばかりを追うのは、ハヂです。

とても、わたくしは、今後同席する事は出来ません。トミの職を辞することにさせていただきます。職場放棄だと、罪に問われても致し方ありません。それが、死をもっての罪ともなろうと、決心は変わりません』

と言って、クシヒコはホノアカリさんの許から去る事になりました。追従して、アマノコヤネも、ホノアカリさんの許から去ります。

フトタマや、カクヤマなど、ホノアカリさんの重臣たちは協議しましたが、遷都の決定には変更は為されませんでした。そして、アスカの地にミヤコ（首都）が遷されます。アスカのミヤの周囲にはアスカカワ（川）を掘り入れ導いて、ミソギ（禊ぎ）をすることで、クシヒコのイサメ（諫言）に対する対応としました。アスカのミヤは、飛鳥坐神社（あすか に ます かみやしろ）、現在の奈良県高市郡明日香村飛鳥に最有力候補地を見る事が出来ます。

（C）　池田　満